

備後國府跡

—推定地にかかる第6次調査概報—

1 9 8 8

広島県立埋蔵文化財センター

例　　言

- この概報は、昭和62（1987）年4月13日～6月5日にかけて府中市元町で実施した備後國府跡推定地の第6次発掘調査概報である。
- 発掘調査は、昭和62年度国庫補助金事業として広島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 発掘調査は松村昌彦・伊藤実・唐口勉三が行い、遺物の実測・写真撮影は伊藤・唐口が行った。トレース及び拓影は若狭智恵・新本尚子（旧姓中川）の両名による。
- この概報の執筆・編集は唐口が行った。
- トレンチには桁の一連番号を付し、上1桁の数字は調査年次を表す。
- 遺構の表示記号は、SA（楕状遺構）、SB（建物跡）、SD（溝状遺構）、SE（井戸）、SK（土塙）、SP（ピット）、SX（その他・不明遺構）とした。
- 土器の断面は、土師器・土師質土器：白ヌキ、須恵器：黒ヌリ、施釉陶器：濃いアミ目、磁器：淡いアミ目とした。
- 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地形図（府中・井原）を使用した。
- 第2図は、府中市役所都市計画課提供の都市計画図をもとに作製した。
- この概報の北位は国土座標による。

目　　次

I はじめに.....	(1)
II 位置と環境.....	(2)
III 調査の概要	
1. 既往の調査.....	(3)
2. 本年度の調査.....	(4)
IV 遺構と遺物	
1. 砂山地区.....	(5)
(1) 歴史時代の遺構と遺物.....	(5)
(2) その他の遺構と遺物.....	(17)
2. 松原地区.....	(24)
V まとめ.....	(28)

図版目次

図版1	a 601T 遺構検出状況（南東から） b S X 604 (601T) 遺物出土状況（北西から） c S D 604 (601T) 换出状況（北から）	図版5 a 松原地区近景（北から） b 605T 遺構検出状況（東から） c 605T 土層堆積状況（南から）
図版2	a 602T 遺構検出状況（北西から） b S X 604 (602T) 瓦片出土状況（北西から） c S K 607 (602T) 遺物出土状況（南東から）	図版6 S D 608 (603T) 出土土器 (1) 図版7 S D 608 (603T) 出土土器 (2)
図版3	a 603T 遺構検出状況（北東から） b 603T 遺構検出状況（西から） c S D 608 (603T) 遺物出土状況（西から）	図版8 603T・604T 出土土器 図版9 603T 出土土器・土製品・鉄器
図版4	a S D 608 (603T) 遺物出土状況（北から） b S E 618 (604T) 上層集石検出状況（北東から） c S E 618 (604T) 完掘状況（北東から）	図版10 602T・604T 出土瓦 図版11 S X 604 (601T) 出土土器 (1) 図版12 S X 604 (601T) 出土土器 (2) 図版13 601T・602T 出土土器 図版14 601T 出土土器及び605T 出土土製品 図版15 605T 出土土器

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (1 : 50,000府中・井原)	(2)
第2図	昭和62年度トレンチ位置図及び周辺地形図 (1 : 2,500)	(4)
第3図	砂山地区トレンチ配置図 (1 : 600)	(5)
第4図	601T・602T 遺構実測図 (1 : 80)	折込
第5図	603T 遺構実測図 (1 : 80)	折込
第6図	S D 608 (603T) 遺物出土状況実測図 (1 : 30)	(7)
第7図	S E 618 (604T) 実測図 (1 : 40)	(8)
第8図	S D 608 (603T) 出土土器実測図(1) (1 : 3)	(12)
第9図	S D 608 (603T) 出土土器実測図(2) (1 : 3)	(13)
第10図	603T・604T 出土土器実測図 (1 : 3)	(14)
第11図	602T・604T 出土瓦拓影実測図 (1 : 6)	(15)
第12図	603T 出土土製品・鉄器実測図 (1 : 2)	(16)
第13図	S X 604 (601T) 遺物出土状況実測図 (1 : 20)	(17)
第14図	S K 607 (602T) 遺物出土状況実測図 (1 : 20)	(17)
第15図	S X 604 (601T) 出土土器実測図 (1) (1 : 3)	(20)
第16図	S X 604 (601T) 出土土器実測図 (2) (1 : 3)	(21)
第17図	601T・602T 出土土器実測図 (1 : 3)	(22)
第18図	601T 出土土器実測図 (1 : 3)	(23)
第19図	605T 遺構実測図 (1 : 80)	(24)
第20図	605T 出土土器実測図 (1 : 3)	(27)
第21図	S E 401 出土土器法量分布図	(29)
第22図	S D 608 出土土器法量分布図	(29)

【はじめに

備後国府跡の探究は、備後地域の古代史の解明に欠くべからざる事項であり、古くからその所在地について多くの研究者によって研究が進められ、その一つとして府中説が唱えられてきた。これは10世紀に編集された『倭名類聚抄』の国郡部に「國府在葦田郡」との記載があることから、古代の葦田郡のなかに国府があり、現在の府中市の市街地及びその一帯であろうと推定されてきた。しかし、市街地における発掘調査は行われたことはなく、国府跡との確証は得られないままであった。

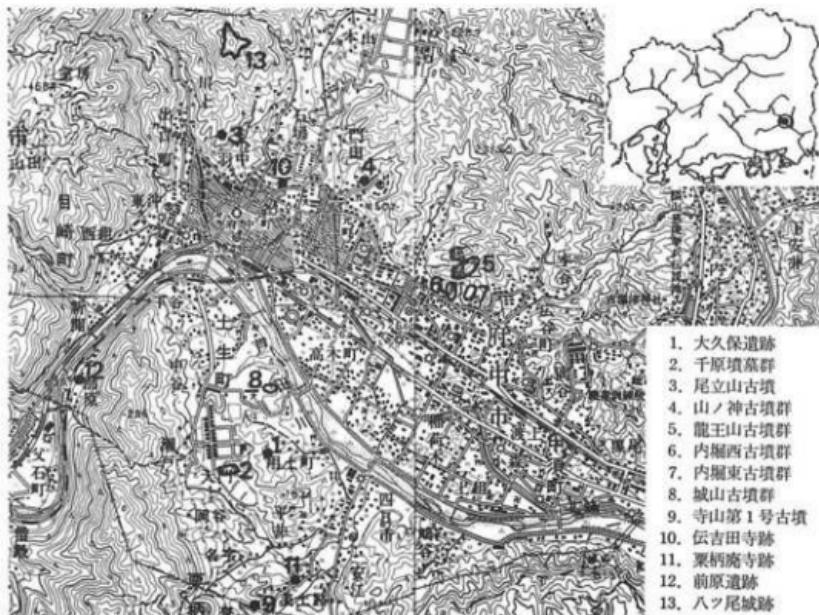
一方、福山市及びその周辺地域が昭和38（1963）年に備後工業整備特別地域に指定されるなど、工業の急速な発展に伴い、府中市でも平野部とその周辺の丘陵部の開発が進み、市街地が拡大している。このため、国府の存在の確認が困難になることが予想され、早急に保存対策を講ずる必要があった。そこで、広島県教育委員会は昭和57（1982）年度から年次的に発掘調査を実施することになり、昭和57年度は広島県教育委員会文化課、昭和58（1983）年度以降は広島県立埋蔵文化財センターが調査を担当している。本年度は第6次発掘調査として府中市元町で実施した。経費は国庫補助金2,000千円、県費負担金2,000千円の合計4,000千円で昭和62（1987）年4月13日～6月5日にかけて調査を行った。

現地での発掘調査については潮見浩（広島県文化財保護審議会委員）、村上正名（同）、河原純之（文化庁文化財主任調査官）、松下正司（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所長）の各氏、出土遺物の検討等については佐藤昭嗣（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所所員）、鈴木康之（同）、向田裕始（東広島市教育委員会社会教育課）の各氏から御指導・助言を頂いた。また、調査にあたって地元府中市役所、府中市教育委員会から多くの協力をうけ、特に高橋孝二（府中市役所市史編纂室）、岡田伸弘（府中市教育委員会社会教育課）の両氏には調査全般にわたりお世話をになった。さらに土地所有者の佐々田昇一氏や調査に参加された地元の方々からは多大な協力をうけた。記して深く感謝します。

Ⅱ 位置と環境

府中市は広島県東南部を東流する芦田川が神辺平野に流入する地域にあたり、平野の西端に位置する。市街地の地形は、芦田川が上流域から大量の土砂を運搬して形成した沖積平野及び芦田川に流入する小河川の扇状地から成る。昭和59年度以降、継続して調査を行っている元町地区は、市街地の北側に位置し、南北に貫流して芦田川に流入する音無川の形成した扇状地に立地する。

次に市街地周辺の遺跡を概観してみると、弥生～古墳時代の遺跡として、芦田川南岸の丘陵上に、集落跡である大久保遺跡や墳墓・古墳から成る千原墳墓群、城山古墳群、寺山第1号古墳などがある。一方、市街地北側の丘陵上に、尾立山古墳、山ノ神古墳群、龍王山古墳群、内堀西古墳群、内堀東古墳群等があり、前半期の古墳が多い。古代の遺跡として、元町西側に法起寺式伽藍配置をもつ伝吉田寺跡、芦田川南岸栗柄町に伝吉田寺跡と共に通する軒丸・軒平瓦をもつ栗柄庵寺跡があり、市街地西南部の父石町に軍團跡あるいは駅館跡と推定される前原遺跡がある。また、市街地北方の亀ヶ岳が常城跡と推定されている。なお、亀ヶ岳南側には建仁年間（1201～1203年）に築かれた八ツ尾城跡が存在する。



第1図 周辺主要遺跡分布図(1:50,000府中・井原)

III 調査の概要

1. 既住の調査

府中市街地における調査としては、昭和55（1980）年10月に府川町の府中市文化センター建設地の試掘調査が行われ、中世の遺物が出土した。また、昭和57（1982）年6月に鶴ヶ町の広谷小学校プール建設地の試掘調査が行われ、弥生土器が出土した。しかし、いずれも古代の遺構・遺物は確認されなかった。

備後国府跡の確認調査に関連するものとして、昭和52～56年に神辺説で推定される神辺町湯野地区において、大宮遺跡の5次にわたる調査を行ったが、国府跡と推定できる資料は得られなかった。そこで、昭和57年度から府中説で推定される府中市街地での確認調査^(註)を年次的に行うことになった。

第1次調査（昭和57年度）は広谷町・鶴ヶ町で実施し、鶴ヶ町西田・コモ原・町田・下高田地区で奈良～平安時代の遺物包含層を確認した。

第2次調査（昭和58年度）は鶴ヶ町で実施し、寺の下西・広田・服部・寺ノ前地区で弥生～鎌倉時代の遺構・遺物が検出され、寺ノ前地区では奈良～平安時代の総柱の倉庫と考えられる掘立柱建物跡が確認されており、柱穴掘方から陶硯が出土している。

第3次調査（昭和59年度）は元町で実施し、明ゼン・マニ地区及びツジ地区で古代～中世の遺構・遺物が検出された。特にツジ地区では奈良時代の大規模な建物跡と思われる方形の柱穴列が確認され、陶硯が出土するなど国府の関連施設になる可能性があるものとして注目された。

第4次調査（昭和60年度）も元町で実施し、前年度ツジ地区の南隣ワキ地区では大規模な建物跡は確認されなかつたが、奈良～平安時代の東西方向の溝やピットが検出された。また、音無川西側の砂山地区では奈良～平安時代のピットや溝のほか、平安時代後半の井戸が検出され、木簡や多量の土器が出土した。

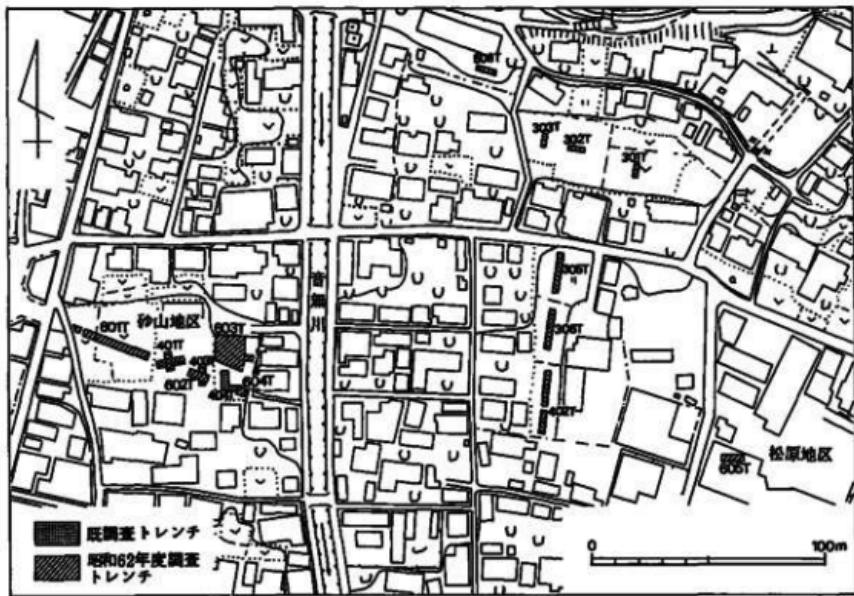
第5次調査（昭和61年度）は元町周辺で実施し、市街地北方の低丘陵の片岡地区で、繩文～中世の遺構・遺物が検出されたほか、元町西方の新角メン地区では奈良～平安時代の包含層を、元町北方のホリノ河内地区でも中世の包含層を確認した。

註 広島県教育委員会『大宮遺跡第1～5次発掘調査報告』 昭和53～57（1978～82）年。

広島県教育委員会・広島県立埋蔵文化財センター『備後国府跡』—推定地にかかる第1～5次調査報告— 昭和58～62（1983～87）年。

2. 本年度の調査（第6次調査）

本年度は元町の砂山地区・松原地区で調査を行った。音無川西側の砂山地区では、国府推定域の西方における様相、特に第4次調査で検出したSE401の周辺の造構のひろがりや内容などを確認するために、601～604Tを設定した。その結果、601Tでは、平安時代～中世の溝状造構2条、小規模な獨立柱建物跡1棟のはかビット、土塙などを検出した。また、その下層では、古墳時代前半期の土器瀦り・溝状造構及び良好な遺物包含層を確認した。602Tは403Tと交差するトレンチで、平安時代と思われるビット、溝状造構、瓦瀦りなどを検出したほか、古墳時代前期の土塙及び、弥生時代前期～古墳時代の土器を包含する砂層を確認した。603Tは東西トレンチを設定したあと、台形に拡張して調査を行い、平安時代～中世のビット・土塙・溝状造構など200個あまりの造構を確認した。なかでも、東西南向の溝状造構から、平安時代後半の土器瀦りを検出した。604Tでも、平安時代後半の井戸・ビットを検出した。以上、砂山地区では平安時代～中世の造構がひろがっていることが確認できた。一方、国府城の東側の様相を把握するために元町東方の松原地区に605Tを設定した。造構は古墳～平安時代のビット・土塙・溝状造構などを検出し、奈良～平安時代の遺物が多量に出土しており、当該期の造構が濃密にひろがっていることが推定される。



第2図 昭和62年度トレンチ位置図及び周辺地形図(1:2,500)

IV 遺構と遺物

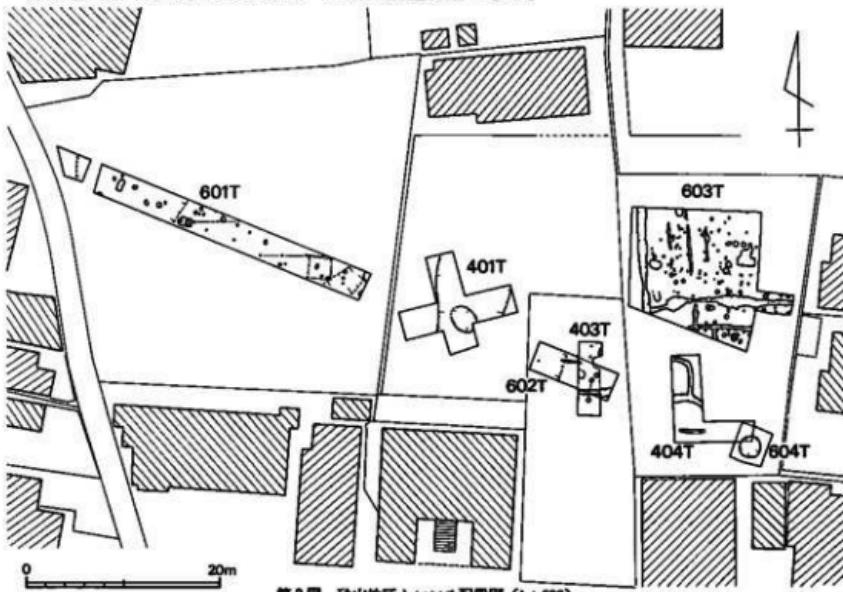
1. 砂山地区（第3図）

(1) 歴史時代の遺構と遺物

a. 遺構

601T（第4図、図版1a）

土層の堆積状況は、トレンチ中央部においては、第1層（耕作土）、第2層（床土・茶褐色土）、第10・11層（褐色～灰色質土）となり、西側では第2層の下に第3～9層（暗褐色系土）があり、東端部でも第2層の下に第12～14層（暗褐色系土）が入る。つまり、第10・11層が中央部で盛り上り、両端部にかけて傾斜しており、旧地形は緩やかな起伏があったことがうかがわれる。遺構は第2層及び第4・12層の下面で確認された。前者では、ピット・土塙があり、東西方向の棍状遺構（S A601・602）、掘立柱建物跡（S B603）を確認した。また、第4層下面ではいわゆる古式土師器の土器窯（S X604）、第12層下面では古墳時代前期の溝状遺構（S D605）がある。遺物は第2層から平安時代～中世の土器、第3～9層及び第12～14層から古墳時代前半期の土器が出土し、特に第3～9層は良好な包含層である。なお、第10・11層は無遺物層である。



第3図 砂山地区トレンチ配置図 (1:600)

S A 601・602 どちらもほぼ東西方向に平行してのびる柵状遺構である。2条の間隔は3.6m前後、それぞれの柱間寸法は2.2~2.4mで、柱穴は直径0.15~0.24m、深さ0.12~0.21mと小規模である。平安時代~中世と考えられるが、限定できない。

S B 603 1間×1間の小規模な掘立柱建物跡で、方向は約N 4°Eほどである。柱間寸法は2.0~2.3mで、柱穴は直径0.22~0.42m、深さ0.12~0.19mである。時期は平安時代~中世と考えられ、方向がS A 601・602とずれており、時期差があると考えられる。

602T（第4図、図版2a）

土層の堆積状況は、第1・2層（客土・旧耕作土）、第3・4層（旧床土・茶褐色粘質土）、第5~7層（茶褐色系土）、第8層（灰青褐色砂質土）、第13層（暗茶褐色粘質土）となり、西側では第8層以下が粗砂を多く含む砂質土（第9~12層）になる。基本的に水平に堆積しているが、第8層直下面が東側に緩やかに傾斜しており、601T東側の傾斜につながると思われる。遺構は第7層直下で溝状遺構（SD 402）、ピットがあり、第8層直下でピット（SP 404・405）、第13層直下で土塙（SK 607）がある。なお、西側で第13層を掘り込んだ落込の中で、瓦溜り（SX 606）を検出した。遺物は第5~7層で平安時代~中世の土器、第13層で須恵器を含まない土師器のみ出土した。なお、第9~12層の砂層から、弥生時代前期・中期後半~後期・古墳時代前期の土器・6世紀代の須恵器などが混在して出土しており、二次堆積と考えられる。

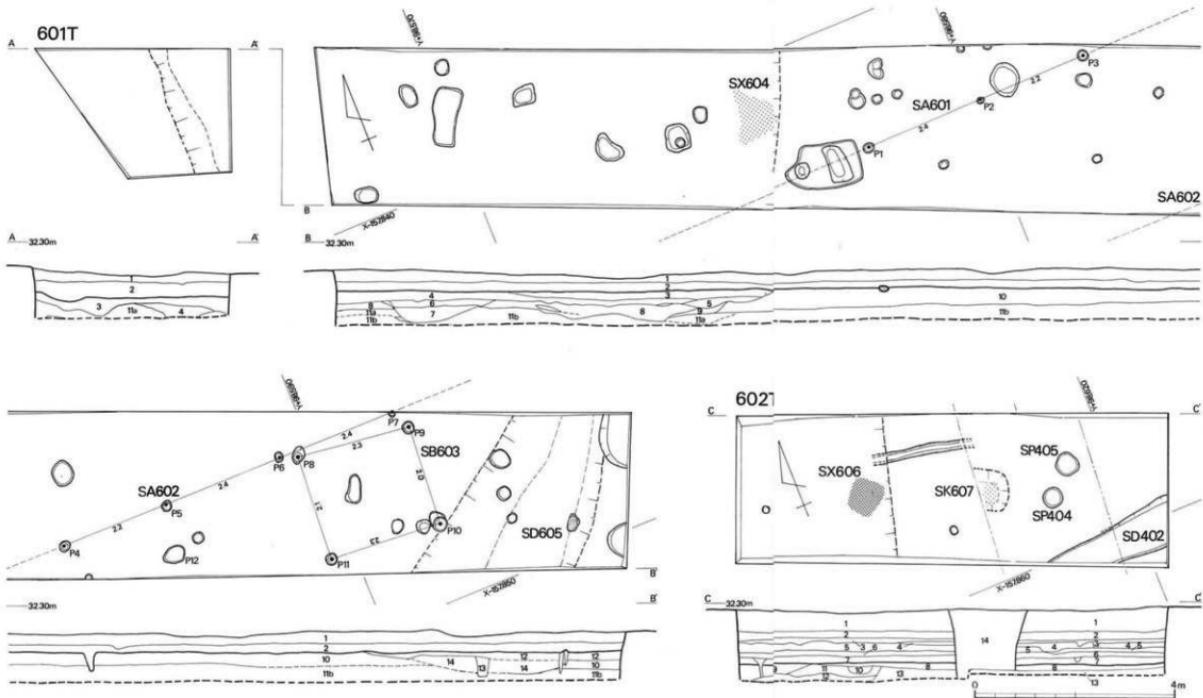
S X 606（図版2b）20枚以上の平瓦ばかりの瓦溜りで、すべて細片で完形になるものはない。約1m四方の範囲に高さ約0.1mほど盛り上げた状態で検出された。遺構は第8層を掘り込んだものと思われるが、その掘方は確認できなかった。自然的な二次堆積ではなく、一括投棄されたものとみられる。

S D 402 第4次調査で検出した東西方向に走る溝状遺構で、幅0.7~0.9m、深さ0.2m前後である。遺物は細片ばかりで、時期は平安時代~中世と思われる。

603T（第5図、図版3a・b）

土層の堆積状況は、第1層（耕作土）、第2・3層（床土・茶褐色土）、第4層（灰褐色砂質土）、第8層（明褐色砂質土）、第10層（暗茶褐色砂質土）となる。遺構は第4層直下で溝状遺構（SD 608~613）、土塙（SK 614~617）、柱穴と思われるピット約200個などを検出した。遺構面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。遺物は第4層で平安時代~中世の土器、瓦片が多く出土し、第10層からは弥生~古墳時代前期の土器が出土した。

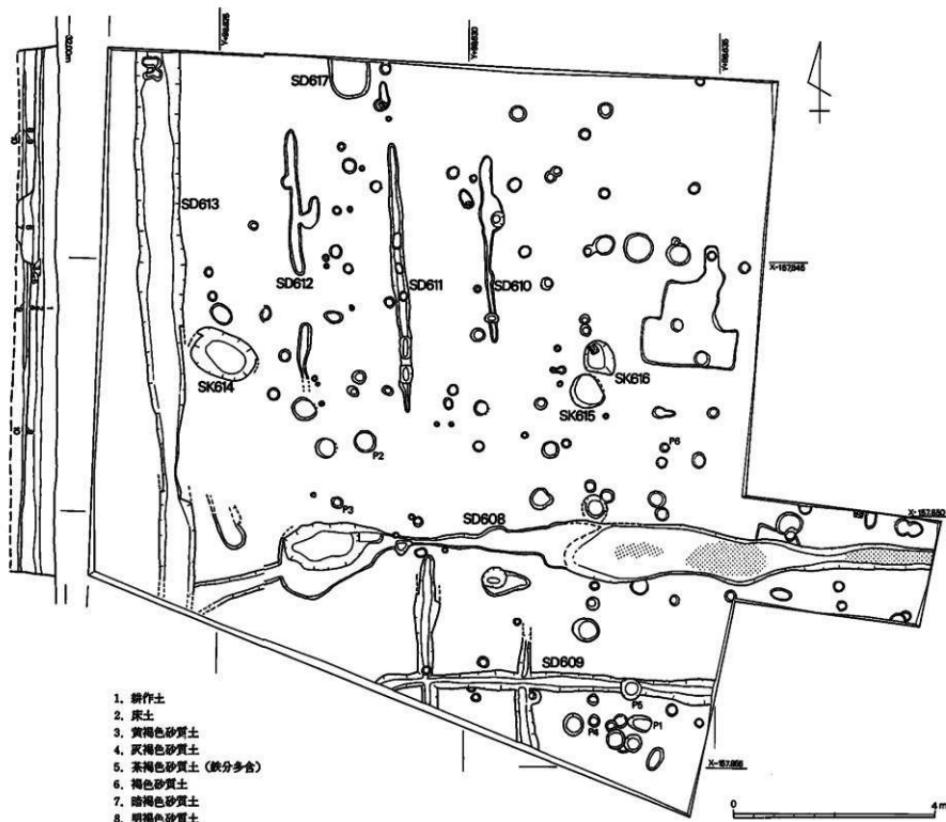
S D 608（第6図、図版3c・4a）ほぼ東西方向に走る溝状遺構である。幅0.2~0.5



- 601T
- 耕作土
 - 床土・茶褐色土
 - 暗灰褐色砂層
 - 灰褐色砂層（粒子粗い）
 - 褐色砂質土
 - 黑褐色砂質土
 - 暗褐色砂質土（粒子粗い）
 - 暗褐色砂質土
 - 褐色粘質土
 - 褐色砂質土
 - a 灰色砂質土（細かい）
 - b 灰色砂層
 - 灰茶褐色砂質土（4層に似る）
 - 灰茶褐色砂質土
 - 暗茶褐色砂質土
 - 黑褐色粘質土（炭化粒子多く含む）

- 602T
- 客土
 - 旧耕作土
 - 旧土
 - 茶褐色粘質土
 - 茶褐色砂質土
 - 暗茶褐色粘土（真砂含む）
 - 暗褐色砂層
 - 灰茶褐色砂質土
 - 明灰褐色砂質土
 - 灰褐色砂層（細め細かい）
 - 茶褐色砂質土（粗砂含む）
 - 灰褐色砂層（粗砂含む）
 - 暗茶褐色粘質土

第4図 601T・602T造構測定図(1:80) (赤いア'目は土器満り、黒いア'目は瓦満り)



第5図 603 T 造耕実測図 (1:80) (ア:日は土被り)

*m*と細いもので、2か所でそれぞれ幅1.5m、1.2mまで膨んでいる。深さは狭い所で0.05m、幅広の部分で0.3mである。埋土は下層は砂質土で流水のあったことを示し、上層は炭化粒子を多く含む粘質土で流水が少ないか皆無に近い状況を示している。遺物は下層ではほとんど合まず、上層で土器窓り状となって多量に出土した。これらからみて流水が停止したあと土器類を一括廻棄したものと思われる。性格は不明である。時期は出土土器から平安時代後半に比定される。

S D 609 ほぼ西から東に流れ、南北方向に走るものと交差する溝状遺構である。幅0.2~0.5mと狭く、深さ0.1m前後である。埋土は黒褐色土である。遺物は細片が多く出土している。時期は平安時代後半で、出土土器からS D 608にやや先行するものと思われる。

S D 610~612 北から南に向かって流れる溝状遺構3条である。幅0.1~0.3m、深さ0.05m前後である。埋土・方向・出土土器からS D 609につながると考えられる。

S D 613 北から南に向かって流れる溝状遺構である。幅0.6~0.1m、深さ0.2m前後としっかりしたもので、埋土は褐色砂質土である。遺物は細片が多く出土している。S D 608との切り合い関係及び土器からみて、S D 608より新しく、中世まで下るものであろう。

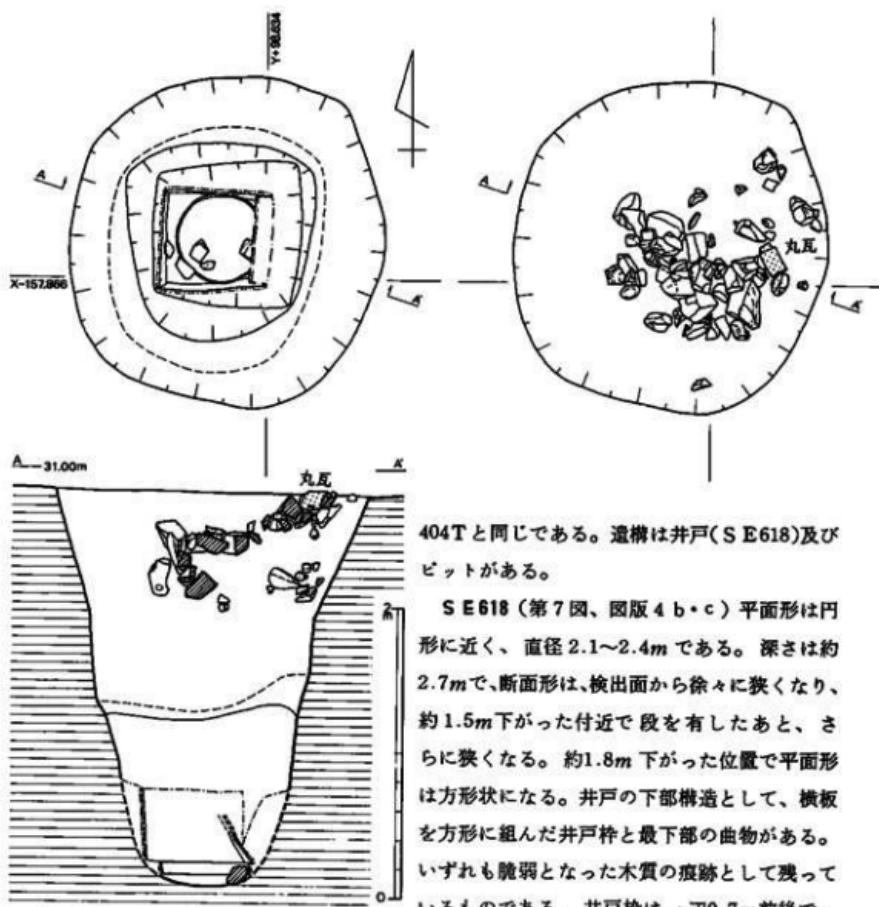
S K 614 長径約1.5m、短径約1mの楕円形の土塙である。深さは約0.25mで舟底状を呈する。出土土器からS D 608と同時期と考えられる。

S K 615~617 直径0.6~0.7mの不整円形の土塙で、深さは0.3~0.4mである。埋土・出土土器からみて、S D 613と同時期と考えられる。

604 T

404Tの東に設けた約3×3mの調査区で、土層の堆積状況は基本的に





第7図 SE618 (604T) 実測図 (1:40)

404Tと同じである。遺構は井戸(SE618)及びピットがある。

SE618(第7図、図版4b+c)平面形は円形に近く、直径2.1~2.4mである。深さは約2.7mで、断面形は、換出面から徐々に狭くなり、約1.5m下がった付近で段を有したあと、さらに狭くなる。約1.8m下がった位置で平面形は方形状になる。井戸の下部構造として、横板を方形に組んだ井戸枠と最下部の曲物がある。いずれも脆弱となつた木質の痕跡として残っているものである。井戸枠は一辺0.7m前後で、高さは0.5mほど残っているが、本来は1m近くまで組まれていたと思われる。なお東側の横板が内側に倒れかかっている状況が確認された。曲物は直径0.6mに前後、高さは約0.1mと浅いものである。埋土は粘質土と砂質土が折り重なるように堆積しており、自然に埋没した状況を示している。埋土の上層部は拳大~頭大の角礫を多量に含んでいる。その断面からみて、東側の高い位置から、西側に向かって傾斜しており、東側の掘方近くから内側の凹みに崩れ落ちた状況を示している。遺物は平安時代後半の土器の細片や瓦片が多く出土しており、当該期に自然に埋没したものと考えられる。

b. 遺物(第8~13図、図版6~10)

土器類

SD 608 (603T) 土師器(皿・杯・碗)、黒色土器、瓦器、須恵器(皿・碗・杯・甕)、
縄釉陶器、白磁など400個体以上出土しており、土師器皿、杯が圧倒的に多い。この他に、瓦片、鉄釘、鉄塊なども出土している。

土師器 皿(1~16) 平底の皿で、いずれも時計回りの回転ヘラ切りである。底部に板目状圧痕が残るもの(1~5)とみられないもの(6~16)とがある。前者は体部下半で一度屈曲したあと口縁部直下で外反する。見込み部分に不定方向のナデを施す。口径8.3~9.6cm、器高1.2~2cm。後者は体部の形態で更に2分できる。6~13は直線的に長く立ち上がるもので、底部がヘラ切り後未調整のもの(6~9)とナデ消すもの(10~13)がある。口径8.4~8.8cm、器高1.1~2.1cm。14~16は短く立ち上り、口縁端部は尖りぎみである。底部は丁寧にナデ消す。口径7.7~8.2cm、器高0.9~1.5cm。

高台付皿(17) 底部は分厚く、わずかに立ち上がりがみられる。高台は「ハ」の字に長く開く。口径8.8cm、器高2.5cm。

杯(18~41) 底部がヘラ切りのもの(a類)と糸切りのもの(b類)がある。a類(18~40)が圧倒的に多い。殆ど時計回りの回転ヘラ切りで、板目状圧痕を残す。見込み部分の形態から3分できる。18~22は見込み中央部がほぼ平坦で、厚さは0.5cm前後のもの。23~39は中央が若干盛り上り、厚さ0.7~1cmのもの。これらは体部はほぼ同形態で、直線的に細長く立ち上がる。焼成は不良のものが多く、淡褐色系である。口径13.3~15cm、器高2.5~4cm。40は見込み中央部が凹むもので厚さ0.3cmである。体部は下半から薄くなりながら内湾ぎみに立ち上がる。底部はヘラ切り痕をナデ消す。焼成は不良で、淡乳褐色である。口径13.8cm、器高3.4~3.8cm。b類(41)は静止糸切り痕を明瞭に残す。厚さ0.9cmの底部から薄くなりながら内湾ぎみに立ち上がる。焼成は不良で、淡褐色である。

高台付碗(42~44) 高台の形態が、断面三角形で外に開くもの(42)と断面方形で細長く垂下するもの(43、44)がある。いずれも体部は内湾して立ち上がり、口縁部直下で外反する。内面は丁寧なヘラミガキ、外面はナデを施す。42の体部下半に指頭圧痕が残り、中位に粘土の接合痕がみられる。胎土は細かく、焼成は良好で、乳白色である。42は口径14.3cm、器高4.6cm。43は口径14.1cm、器高4.7~5.5cm。

須恵器 碗(45) 時計回りの回転ヘラ切りの平高台をもつ。体部は内湾したあと直線的にのびる。粗い砂粒を含み、焼成は良好で、淡灰色である。口径14.6cm、器高5.8cm。

白磁（図版9のC） 体部破片で全体の形態は不明だが、碗と思われる。ややにごる釉を内面及び外面下部まで施し、釉だれがみられる。胎土は灰白色で黒斑点がある。

S E 618 (604T) 土師器（皿・杯・碗・壺）、黒色土器（碗）、須恵器（皿・碗・壺・壺）、白磁（皿・碗）などの細片が出土した。なお瓦片（丸瓦・平瓦）も多く出土した。

土師器 皿（46・47） 46は底部は回転ヘラ切りで、体部は短い。口径9.2cm。器高1.2cm。47は丸底で、いわゆる「て」の字状口縁である。内面は丁寧なナデ、外面は指頭圧痕が残る。胎土は細かく、焼成は良好で、乳白色である。口径10.5cm、器高1.7cm。

高台付碗（48～51） 高台部のみで、その形態が、断面長方形の高いもの（48・49）と断面長三角形で低いもの（50・51）とがある。前者は全体的に分厚く、胎土は細かく、焼成は良好で、淡茶褐色系である。高台径6.2～6.5cm、高台高0.5～1.6cm。後者は薄手で、焼成はやや不良で、乳白色である。高台径5.4cm、高台高0.9cm。

黒色土器A類 碗（52） 口縁部のみ残る。内外面ともヘラミガキを施す。胎土は細かく、焼成は良好で、炭素吸着部分は漆黒色、その他は灰白色である。口径14.5cm。

須恵器 高台付碗（53～56） 高台の形態が、断面台形で外に開くもの（54・55）と断面三角形で垂下するもの（56）とがある。前者は体部は薄手で内湾ぎみに立ち上がり、口縁部直下で外反する。胎土は粗い砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面の口縁部下約2cmまでが帯状に暗灰色で、それ以下が青灰色である。また、見込み部周縁に円形の段がつくなど、重ね焼きの痕跡が認められる。54は口径15.3cm、器高6.3cm。なお、53も体部の形状・胎土・焼成・重ね焼きの状況などから54と同形態と考えられる。56の体部は厚手で形状は不明である。底面にヘラ切り痕を明瞭に残す。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗灰色である。

皿（57） 回転ヘラ切りの平底で、体部は短く立ち上る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、淡青灰色である。口径9.8cm、器高1.5cm。

白磁（58） 皿と思われる口縁部片である。釉はやや緑がかり、内面及び外面の上半に施す。胎土は精良で、灰白色である。口径11.6cm。

碗（59） 高台部を欠く。体部は厚手で、内湾ぎみに立ち上り、口縁端部上面は水平である。内面に櫛描文を施し、その上方に一条の線刻がある。釉は白色で、内外面に施す。胎土は精良で、白色であり、外面に黒斑点がみられる。口径14.6cm。

S D 609 (603T) 土師器（皿）、須恵器（皿・碗・高杯）などの細片が出土し、須恵器が比較的少ない。なお、瓦片・鉄塊なども出土している。

土師器 皿 (60~62) 低く外反ぎみに立ち上がり、端部は尖りぎみである。底部はへラ切り痕を丁寧にナデ消す。胎土は細かく、焼成は良好で、淡黄褐色である。口径7.8~8.6cm、器高は1.1~1.3cm。

須恵器 高台付碗(63) 断面台形状の低い高台で外方に開く。胎土・色調は54・55に似る。

P 1 (603T) **土師器 皿**(64) 口径8.4cm、器高1.2cm。S D609出土皿(60~62)と同形態であり、P 2・3・4出土皿と酷似する。なお、白磁片が共伴する。

S D 613 (603T) **土師質土器**(皿・杯・すり鉢)、須恵質土器片がある。

土師質土器 皿(65) 底部外縁部が強く張り出し、体部は直線的に立ち上がる。口径7.8cm、器高1.5~1.7cm。

P 5 (603T) **土師質土器 皿**(66) 厚手の底部から短く立ち上がる。口径7.4cm、器高0.9~1.7cm。

P 6 (603T) **土師質土器 皿**(67) 厚手の底部から内湾ぎみに短く立ち上がる。口径7.9cm、器高1.6~1.9cm。

603T 包含層(第4層) **土師器**(皿・杯・碗)、黒色土器(碗)、瓦器(碗)、須恵器・須恵質土器(杯・碗・壺)、白磁(皿・碗)、青磁(碗)など細片が多く出土した。

瓦器 碗(68) 口縁部のみ。直線的に立ち上がり、端部は尖りぎみである。胎土は砂粒と含み、焼成はやや不良で、黒灰色~淡灰色である。口径14cm。

黒色土器A類 高台付碗(69) 断面三角形の高台で、外に開く。高台径7cm。

土師器 高台付碗(70) 断面三角形の高台で、外に開く。体部に指頭圧痕が残る。焼成は不良で、乳白色である。高台径5.8cm。

須恵器 高台付杯(71) 底部縁部のやや内側に断面方形の高台をもつ。高台径9.6cm。

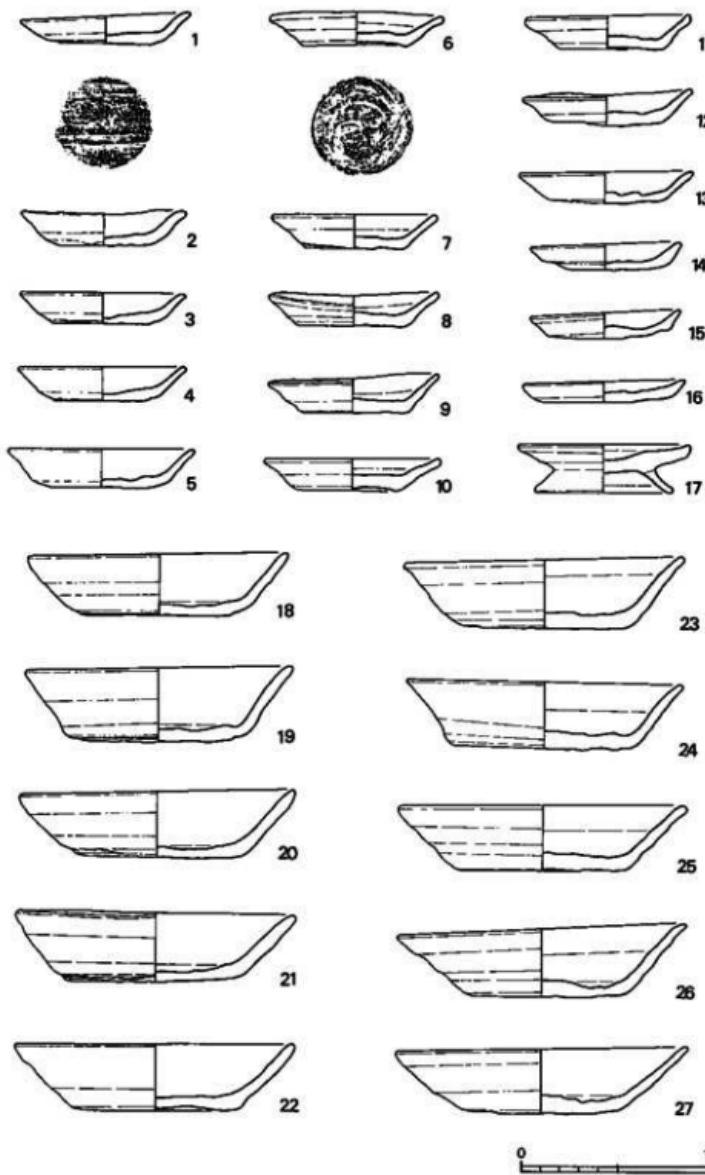
高台付碗(72) 底部縁部に断面方形の低い高台をもつ。高台径7.4cm。

碗(73) 平高台で、直線的に立ち上る。

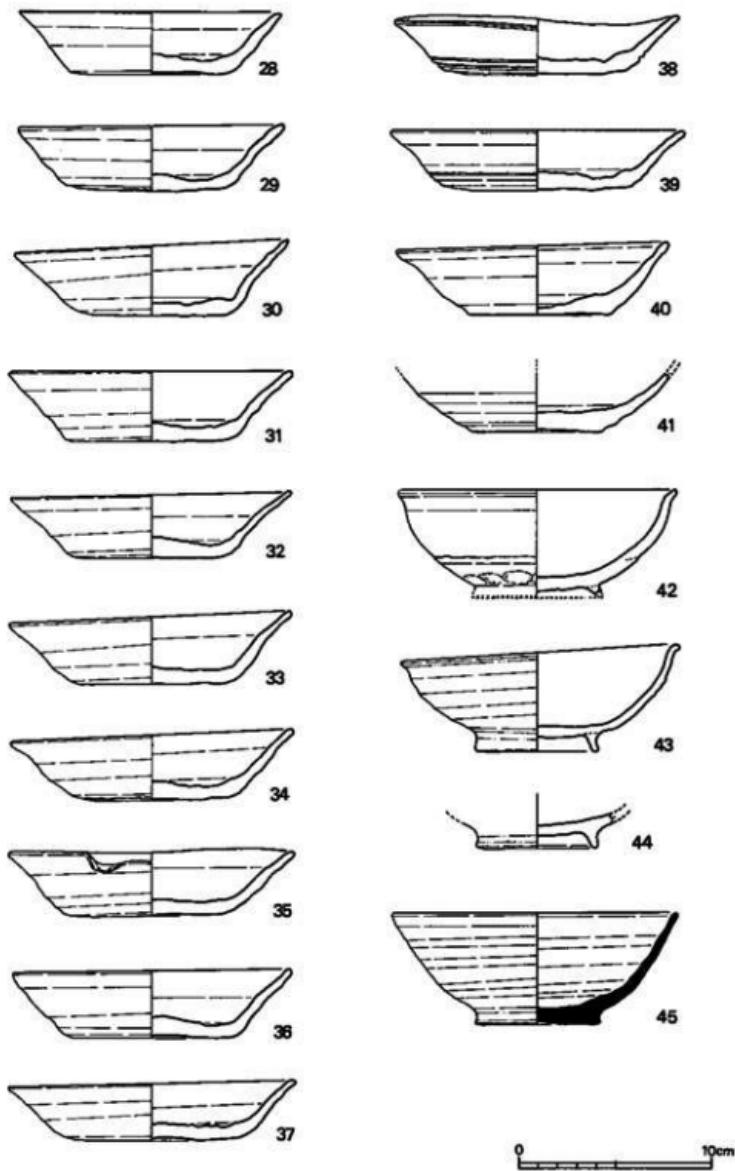
白磁 皿(74~76、図版9のD) 74は口縁部のみ。黒斑点がみられる。75・76はやや上げ底の底部のみ。Dは体部片で、内面に花文を配し、見込み部周縁に沈線をもつ。いずれも釉は緑がかり、胎土は精良で、灰白色である。74は口径11.4cm。

碗(77~79、図版9のA・B) 77及びA・Bは玉縁をもつ口縁部片である。A・Bに黒斑点がある。78は器肉の厚い削出高台で、79はやや高めの削出高台である。いずれも釉はややにごり、胎土は精良で、灰白色である。77の口径15.2cm。

青磁 碗(80) 高台部のみ。見込み部周縁に明瞭な段を有し、体部は直線的に立ち上がる。釉は淡緑色で、全面にうすく施す。胎土は精良で、灰白色である。

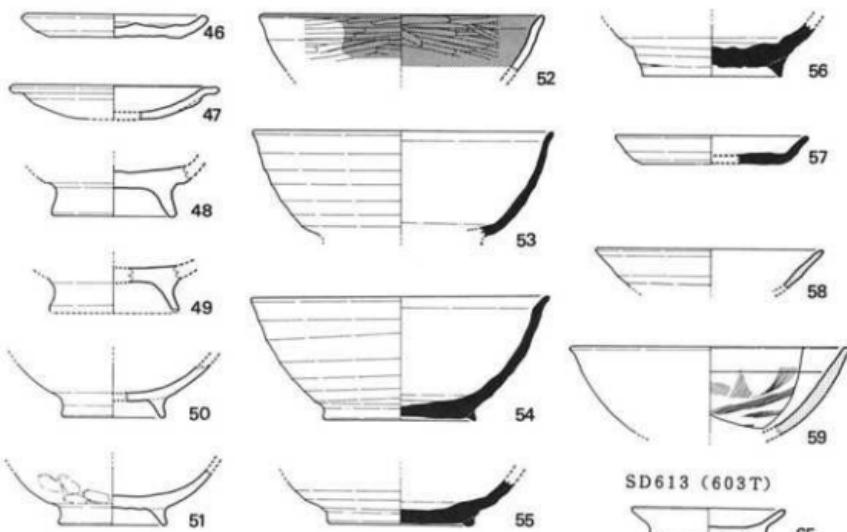


第8図 SD608 (603T) 出土土器実測図(1)(1:3)



第9圖 S D608 (603T) 出土土器実測図(2) (1 : 3)

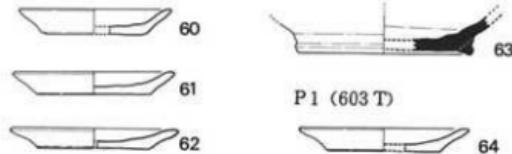
SE618 (604T)



SD613 (603T)



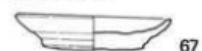
SD609 (603T)



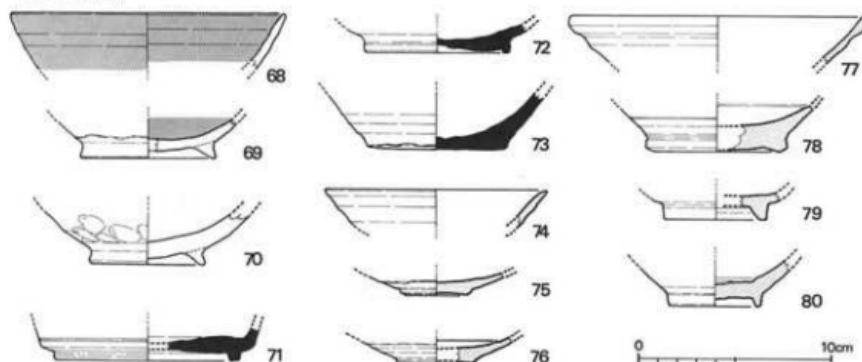
P5 (603T)



P6 (603T)

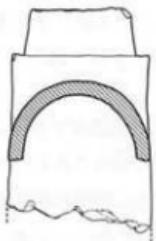


603T包含物



第10圖 603T・604T出土土器実測図 (1:3)

SE618 (604T)

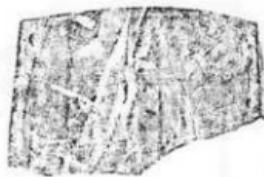


81

SX606 (602T)



82



83



第11図 602T・604T出土瓦拓影実測図 (1:6)

瓦類(第11図、図版10)

いずれのレンチからも広い範囲で瓦片を多量に出土しているが、殆ど細片である。特にSX606(瓦溜り)から平瓦のみで、SE618からは丸瓦・平瓦の細片が目立って多く出土している。軒丸瓦・軒平瓦は出土していない。

丸瓦(81) 玉縁付である。凸面はナデを施し、一部に繩目圧痕が残る。凹面は粗い布目圧痕が残り、布の重ね痕がみられる。焼成は良好で、淡灰褐色である。SE618出土。

平瓦(82・83) いずれも狭端部のみで、桶巻作りである。凹面は布目圧痕を残し、布目幅は82が1.9mm前後、83が1.6mm前後で、後者の頗る圧倒的に多い。凸面は82が繩目圧痕をヨコ方向にナデ消すのに対し、83は繩目圧痕を明瞭に残す。82は焼成が不良で、茶褐色を呈し厚手である。一方、83は焼成が良好で、灰褐色を呈し薄手である。SX606出土。

土製品(第12図、図版9)

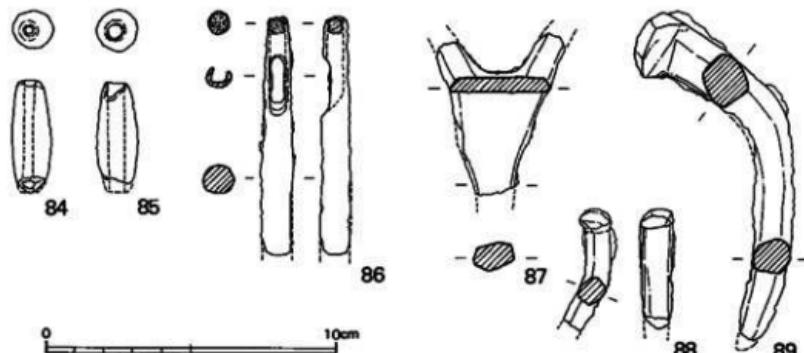
土鏡(84・85) 中位に最大径がある細長い紡錘形である。砂粒を多く含み、焼成は不良で、茶褐色系である。84は3.9g、85は6.3g。どちらも603T第4層出土。

鉄器(第12図、図版9)

棒状鉄器(86) 断面が円形状で、先細りの棒状を呈する。図の下端以下を欠損する。先端から側面へ一部に孔があいて中空になっている。その部分に厚さ約0.4cmの炭化した木質が詰まっている。錆化が著しく、表面の剥落が進行している。性格は不明である。現状の長さ8.1cm、最大径1.1cm、先端部径0.7cm、重さ22.9g。603T第4層出土。

鉄鎌(87) 雁股式有茎鐵鎌で、身部下位に関節を有する。鋒部・笠被先端部は消失している。身部は片刃である。603T第4層出土。

釘(88・89) いずれも折頭形のものである。603T第4層出土。



第12図 603T出土土製品及び鉄器実測図(1:2)

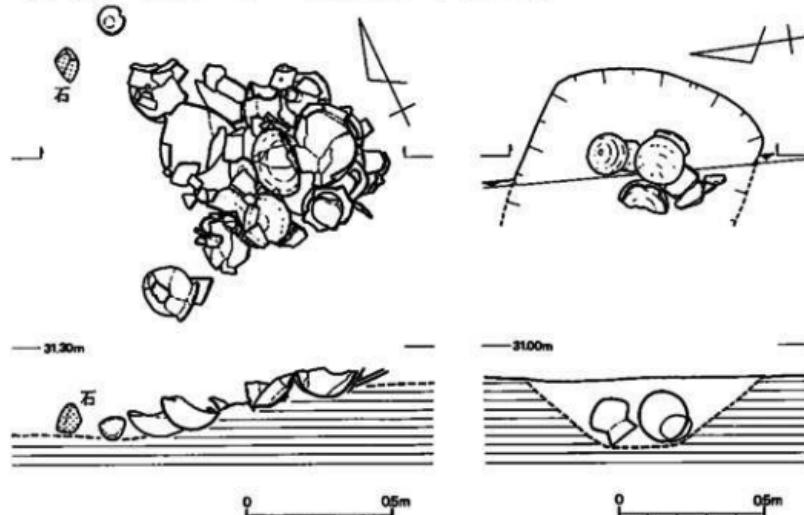
(2) その他の遺構と遺物

a. 遺構

S X 604 (601T) (第13図、図版1 b) 一辺約1mの三角形状に広がる古墳時代前期の土器溜りである。埋土は第4・5層である。土器の重なり状況は、東側でみられ、西側では重ならない。また、断面からみると東側が高く、西側に向かって傾斜している。遺物の遺存状況は東側の高い位置のものは上部が削平をうけて上方が欠失しているのを除き、概ね良好である。出土状況からみて東側から投棄され、西側の低い位置に向かって掘広がりになり、そのまま溜まったものと考えられる。

S D 605 (601T) (第4図、図版1 c) 北東から東西方向に走る溝状遺構で、幅2~3mで南に向かって広がる。深さは0.15m前後と極めて浅く、西側は緩やかに立ち上る。埋土は第12層である。遺物は古墳時代前期の土器（壺・高杯）が出土した。なお、高杯は平滑な河原石の直近に据えられた様な状況で出土した。

S K 607 (602T) (第14図、版図2 c) 一辺約0.6mの方形形状の土塹だが、西側はサブトレンチの掘り下げのため不明である。深さは約0.25mで、壁はゆるやかに立ち上る。埋土は茶褐色粘質土で、遺物は古墳時代前期の土器（壺・甕を約5個体分）が出土した。遺存状況は良好で、投棄したものではなく、埋置した状況を示す。



第13図 S X 604 (601T) 遺物出土状況実測図 (1:20)

第14図 S K 607 (602T) 遺物出土状況実測図 (1:20)

b. 遺物 (第15~18図、図版11~14)

S X 604 (601T) 土器は壺・甕・鉢・高杯・器台など、多種多様の器種がある。ほぼ一括遺物とみてよいであろう。

壺 (90) 複合口縁をもつ。口縁部は外傾し、端部は外方に若干拡張する。頸部は湾曲して大きく外反する。口頭部内外面ともヨコナデ、頸部外面にハケ目が残り、胴部内面はヘラケズリである。焼成はやや不良で、橙褐色である。口径21.9cm。

甕 (91~97) 頸部は強く「く」の字に屈曲して外反する。口縁端部は平坦で、91・94~96は浅い凹線をもつ。胴部は長胴ぎみで、最大径が中位より若干上位にある倒卵形を呈する。丸底に近い小さい底部がつく。94の底部には直径0.8cm前後の穿孔がある。胴部内面はヘラ削りで、中位及び底部に指頭圧痕が残る。外面はハケ目調整で、下半部はナデを行うが、94はハケ目を明瞭に残す。91・93・94の肩部にそれぞれ5条、8条、4条単位の櫛描波状文を施す。また、92の肩部付近に平行のタタキ目と思われる痕跡を残す。法量から口径が14.8~15cmのもの (91・92) と13.1~14cmのもの (93~97) に分けられる。

鉢 (98~101) 法量・形状から大きく3分できる。98は口縁端部は丸く、粘土を内側に折り込む部分がある。体部は内湾ぎみに立ち上る。体部内面は粗いハケ目、外面は指頭圧痕が残り、器表の凹凸が著しい。焼成は不良で、乳白色である。口径11cm、器高5.2cm。99・100は体部は緩やかに内湾して立ち上がり、小さい平底がつく。口縁部はヨコナデで、99の口縁部内側はヨコ方向の櫛描文の上をナデ、暗文風にする。体部内面はハケ目、外面はヘラケズリである。焼成は良好で、淡茶褐色である。口径17.2~19.3cm、器高7.3cm前後。101は口縁部は外反気味で、端部は平坦である。体部は内湾して立ち上り、上位で内側に大きく抉り込み、その上下はやや鋭く突出する。底部は小さい平底がつくと思われる。口縁部内面に6条単位の櫛描波状文を施す。体部内面はヘラ削り、外面はハケ目を残す。胎土・色調は99・100とはほぼ同じ。口径21.6cm。

高杯 (102・103) 杯部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部直下で大きく外反する。口縁端部は102は丸く、103は平坦で沈線を一条施す。底面には直径0.7~1cmの小孔を深さ0.3cmほど穿つ。脚柱部は開きぎみに垂下し、裾部はラッパ状に開く。端部は102は丸く、103は平坦である。103は杯部及び、裾部に一对になるよう凸帯を貼り付けている。また、脚部・裾部にそれぞれ直径1cm前後の孔を3か所と、直径0.9cm前後の孔を6か所に等間隔に穿つ。調整は杯部内外面に3段にわたる放射状のヘラミガキ、脚部外面にもタテ方向のヘラミガキを施し、脚柱部内面はヨコ方向のケズリである。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は

良好で淡橙褐色である。102は口径22.4cm、器高14.8cm。103は口径19.2cm、器高13.3cm。

器台（104） いわゆる鼓形器台で、脚台部を欠く。上台部は長く外反する。筒部は短く、その上下に凸帯を貼り付ける。上台部内面はタテ方向のヘラミガキ、脚台部内面は丁寧なヘラケズリ、外面はナデである。上台部外面ヶ中位に4条単位の櫛描波状文を施す。胎土・焼成・色調は高杯（102・103）に酷似する。口径20.2cm。

S D 605 (601T) 土師器（甕・高杯）がある。

甕（105） 口縁部は内湾ぎみに立ち上り、頸部は「く」の字に屈曲する。胴部は球形に近く、ほぼ丸底である。胴部内面はヘラケズリで、底部に指頭圧痕が残る。外面はハケ目が残り、頸部直下で板の木口による刺突文がある。口径15cm、器高19.5cm。

高杯（106） 杯部は椀状を呈し、底面に直径0.7cm前後、深さ約0.3cmの小孔がある。脚柱部は開きぎみに垂下し、裾部はラッパ状に大きく開く。脚柱部に直径0.8cm前後の孔を対方向に2ヶ所穿つ。焼成は不良で、赤みがかった乳白色である。口径13.8cm、器高9.4cm。

S K 607 (602T) 土師器（甕・直口壺）がある。

甕（107・108） 107の形状は、口縁部は内湾ぎみに立ち上り、端部の平坦面に浅い凹線をもつ。頸部は「く」の字に屈曲し、胴部は球形に近い。108も同形態である。内面はヘラケズリ、外面はハケ目を残す。107は口径12.5cm、器高17.5cm。

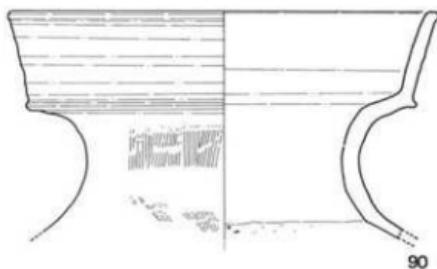
直口壺（109） 口縁部は直線的に長く伸び、端部は尖る。胴部は中位が強く張った扁球形で、丸底がつく。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ目を残す。焼成は不良で、乳褐色である。口径11.6cm、最大径13.3cm、器高14.7cm。

P 12 (601T) 土師器 高杯（110） やや深めの椀形を呈し、底部中央が突き出ている。焼成は不良で、淡赤褐色である。口径12.5cm。

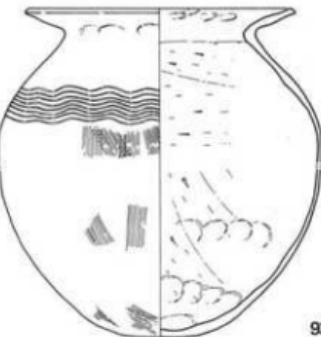
601T 包含層（第3～9層） 古墳時代前期の土師器が多く出土している。

壺（111） 複合口縁をもつ。口縁部は反れながら直立する。頸部は大きく湾曲して開く。口縁拡張部外面に不明瞭な凹線を9条施し、頸部外面にヘラ圧痕による明瞭な羽状文を施す。焼成は良好で、暗赤褐色である。口径20cm。

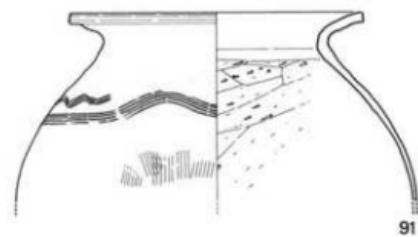
甕（112～115） 口縁部の形態で大きく2分できる。112・113は複合口縁をもつ。口縁部は外傾して立ち上り、頸部は強く屈曲する。112は、内外面とも水ビキ状の丁寧なヨコナデで、胎土は細かく、黄味を帶びており、他の土器と異質である。113は肩部に平行櫛描文をもつ。112は口径23cm。113は口径22.5cm。114・115は単純口縁で、胴部は114は球形に近く、115は肩が張る。114の肩部に刺突文がみられる。114は口径14.5cm、器高20cm。115は口径11.6cm、器高13.9cm。



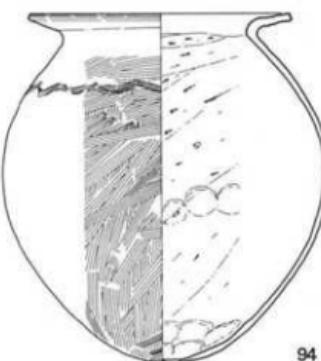
90



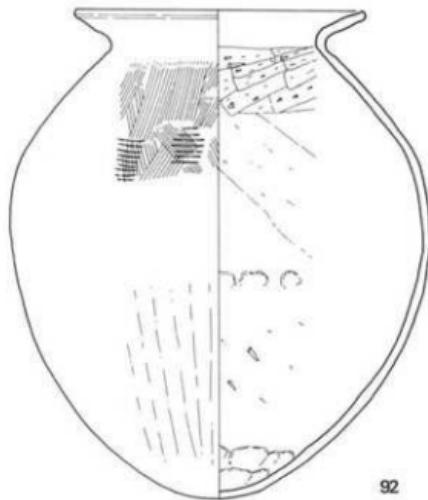
93



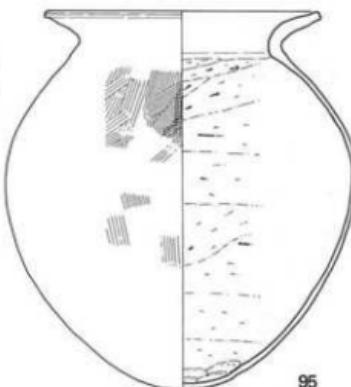
91



94



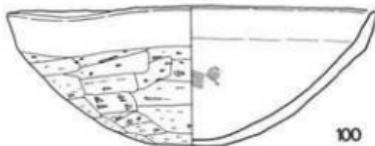
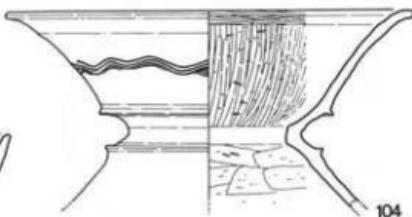
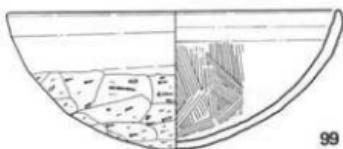
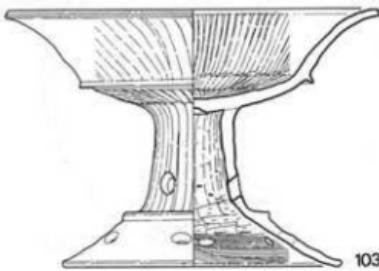
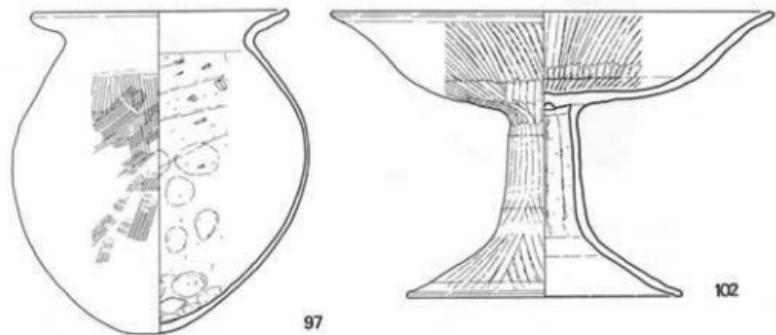
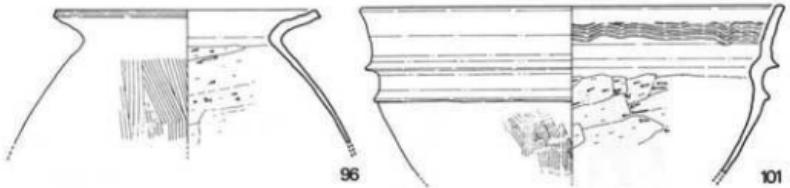
92



95

0 10cm

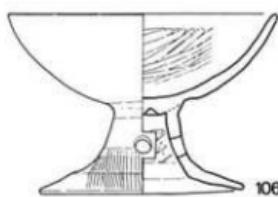
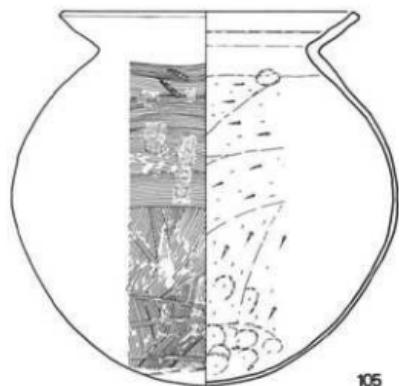
第15圖 S X604(601T) 出土土器実測図(1) (1:3)



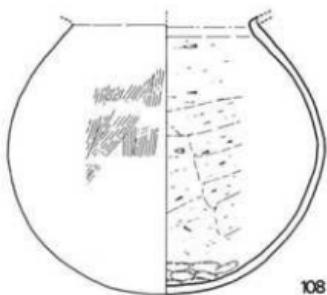
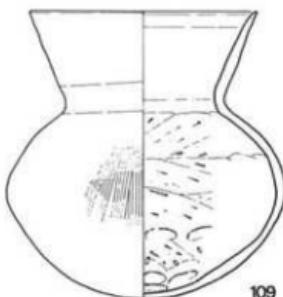
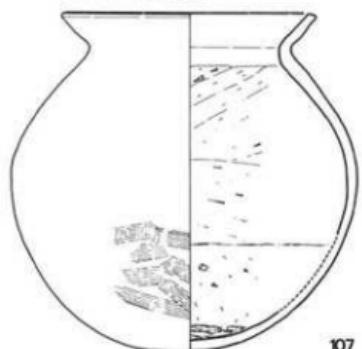
0 10cm

第16図 S X 604 (601T) 出土土器実測図(2) (1 : 3)

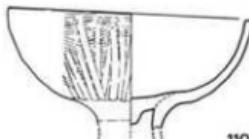
SD605 (601T)



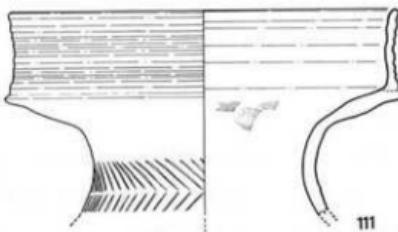
SK607 (602T)



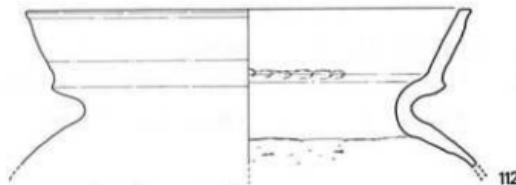
P 12 (601T)



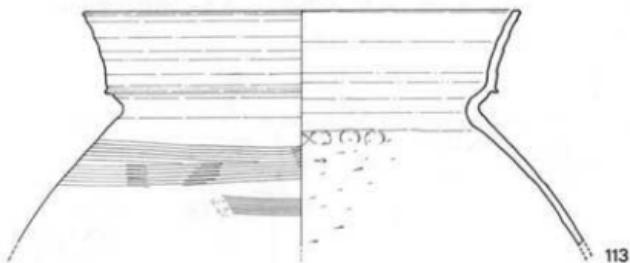
第17図 601T・602T出土土器実測図 (1:3)



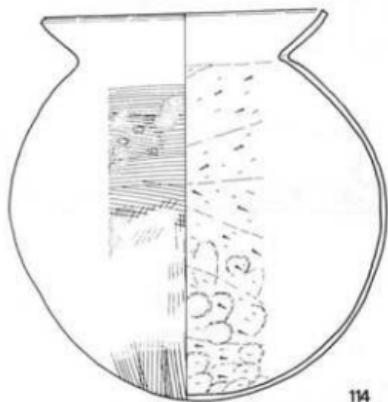
111



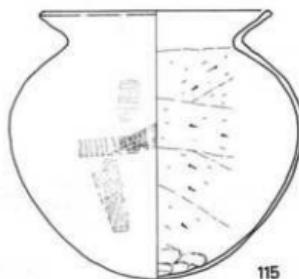
112



113



114



115



第18圖 601T出土土器実測図 (1:3)

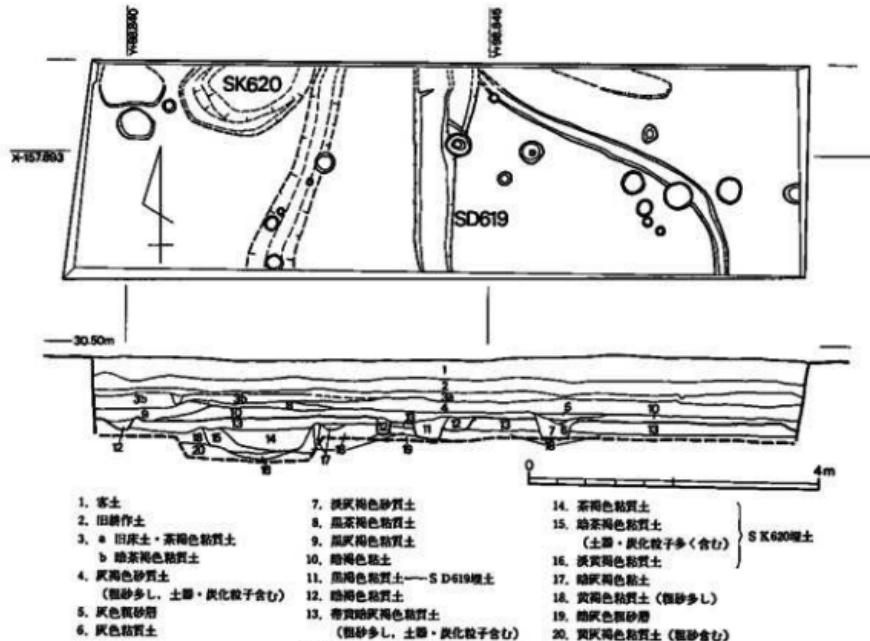
2. 松原地区（図版5 a）

a. 遺構

605 T（第19図、図版5 b・c）

土層の堆積状況は、第1・2層（客土・旧耕作土）、第3層（旧床土・茶褐色土）、第4・10層（灰褐色砂質土・暗褐色粘土）、第13層（暗灰褐色土）、第18層（黄褐色土）となり、第3層以上は水平に堆積し、それ以下は東側に傾斜する。このことは旧地形が東側に傾斜していたことを示す。また、第4層は粗砂を多く含む砂層で、一時に堆積したものと思われる。遺構は、第10層下面で溝状遺構（SD619ほか）、ピットがあるが、ピットの各々の対応関係は確認できなかった。第13層下面で土塙（SK620）、溝状遺構がある。遺物は第4・10層で奈良～平安時代の土器・瓦片を多量に出土し、第13層では古墳時代前期の土器片が出土した。

SD619 断面逆台形のほぼ南北方向に直線的に走る溝状遺構で、幅0.55m前後、深さ約0.2mである。埋土は第11層（黒褐色粘質土）である。遺物は須恵器の蓋（136）がやや浮いた状況で出土しており、8世紀代に埋没したと考えられる。



第19図 605T 遺構実測図 (1:80)

SK 620 平面の規模は不明だが、梢円形になると思われる土壙である。深さ約0.5mで底面中央部が凹み、一段平坦面をもったあと傾斜をもって立ち上る。埋土は第14~16層で、特に第15層で炭化粒子や古式土師器片を多く含む。古墳時代前期に比定される。

b. 遺物 (第20図、図版14・15)

主に第4~10層で土師器（皿・杯・碗・高杯？）、須恵器（皿・蓋・杯・碗・壺）、施釉陶器が多量に出土したほか、瓦片、土製品がある。

土器類

土師器 皿 (116~124) すべて回転ヘラ切りの平底の皿で、明瞭な板目状圧痕があるものは確認していない。体部が長くのびるもの (116~121) と短く立ち上がるもの (122~124) がある。前者は更に外反ぎみにのびるもの (116~118) と内湾して端部が尖るもの (119~121) とがある。116・118・121がヘラ切り痕をナデ消すほかは明瞭に残る。胎土は細かく、焼成は良好で、淡褐色系のものが多い。口径8.8~10.2cm、器高1.2~1.9cm。後者のうち123・124は口縁直下で強く外反する。端部はいずれも尖る。底部は124がヘラ切り痕をナデ消すほかは明瞭に残す。胎土・焼成・色調は概ね前者と同じである。口径9.8~11cm、器高1.4~2cm。

高台付皿 (125) 高台はやや開きぎみに長く垂下する。胎土は細かく、焼成は良好で、淡黄褐色である。口径10cm、器高2.4cm、高台高1.5cm。

杯 (126~128) 回転ヘラ切りの底部で、126・127は内湾ぎみに立ち上る。128は体部との境目が明瞭である。内外面ともヨコナデで、体部中位は強いナデのため凹凸が著しい。口径14.4~14.8cm、器高3.6~4.5cm。

高台付碗 (129~134) 高台が厚手で高いもの (129~131) と低いもの (132~134) がある。前者は開きぎみに垂下する。体部は129・130が内湾ぎみに、131が直線的に立ち上がる。焼成は不良で、淡茶褐色である。高台径8.2~9.3cm、高台高1.4~2.6cm。後者は断面三角形あるいは台形でやや開く。体部は132・133が内湾ぎみに、134が直線的に立ち上がる。焼成は不良で、前二者は乳白色、後者は明黄褐色である。高台径5~6.4cm、高台高0.5cm前後。

須恵器 蓋 (135~141) 口縁部の形態から、かえりがつくもの (135)、端部が屈曲して短く垂下するもの (136・139・140)、屈曲して長く垂下するもの (141) がある。135は天井部に扁平なつまみがつく。焼成は不良で、青灰色である。口径14.6cm、器高2.7cm。136・139は口縁端部が垂直に下がり、140は外方に開く。136は擬宝珠状のつまみがつく。136・139は焼成が不良で、淡灰色系である。140は焼成は良好で、淡青灰色である。136

は口径13.6cm、器高2.7cm。139は口径14.2cm、140は口径14cm。141は天井部につまみがつく。焼成は良好で、青灰色である。口径14.3cm。他に137、138はつまみ部である。なお、136はSD620出土。

高台付杯（142～145） 断面方形の高台がつく。底部は平坦で、強く屈曲して直線的に立ち上がる。142～145は底部縁部よりやや内側に、145は底部縁部に高台がつく。142～145は焼成は良好で、青灰色である。高台径6.2～9.8cm。145は焼成は不良で、淡灰色である。高台径13.2cm。

杯（146） 底部は分厚く内湾して立ち上がり、口縁部は直立する。焼成は不良で、暗灰色～淡灰色である。口径12cm、器高3.5cm。

高台付碗（148） 断面三角形の高台がつく。底面にヘラ切り痕を残す。焼成は不良で、淡青灰色である。高台径6.8cm。

碗（149） 回転ヘラ切りの平底から直線的に立ち上がる。ヘラ切り痕をナデ消している。焼成は良好で、暗青灰色である。底径6.7cm。

壺？（150） 底部縁部に分厚い高台がつき、胴部は内湾ぎみに立ち上がる。底部内面に自然輪がかかる。胎土は精良で、焼成は良好で、淡灰色である。高台径6.6cm。

皿（151） 平底から短く立ち上がる。底部は回転ヘラ切り痕をナデ消す。焼成は良好で、灰青色である。口径10cm、器高1.3cm。

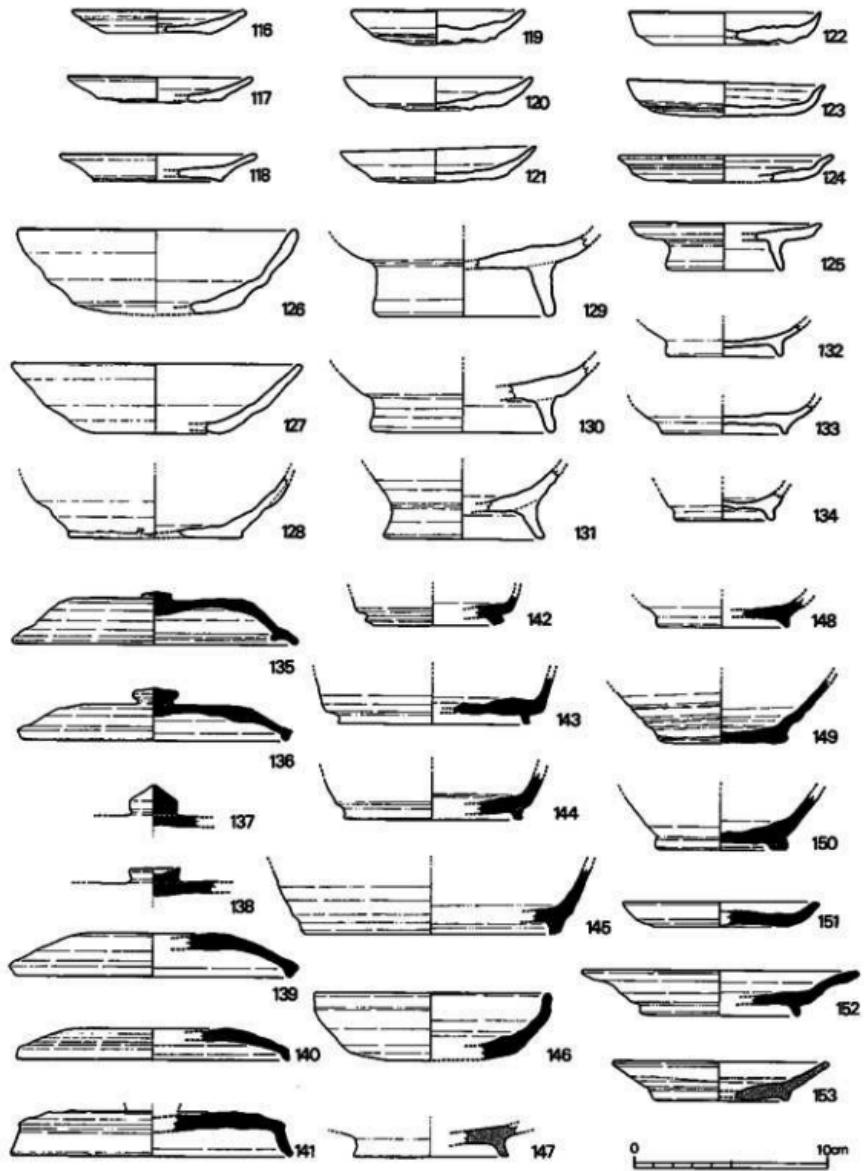
高台付皿（152） 底部縁部よりやや内側に、開きぎみに短く垂下する高台をもつ。体部は大きく外反する。底面は回転ヘラ切り痕をナデ消す。焼成は良好で、暗青灰色である。口径14cm、器高2.4cm。

灰釉陶器 高台付皿（153） 底部縁部に断面三角形の低い高台をもつ。底部は分厚く、体部は直線的に開く。見込み部周縁に明瞭な段を有する。輪は体部外面の中位以上及び内面にかけて施す。胎土は精良、焼成は良好で、淡灰色を呈する。口径11cm、器高2.1cm。

綠釉陶器 高台付碗？（147） 断面長方形のやや高めの高台がつく。底部に回転糸切り痕が明瞭に残る。また、見込み部周縁に浅い凹線がある。輪は茶褐色で、全面にかかる。胎土は精良、焼成は良好で、青灰色である。高台径8cm。

土 製 品（図版15のE～H）

E～Gは棒状を呈する土製品である。Eは直径1.2cm、F・Gは0.8cmの孔が貫通している。E・Fは側面を面取りしているが、Gは成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。E・Fは高杯の脚柱部と考えられるが、Gは性格不明である。Hは器種不明であるが、片面に煤が付着しており、かまどの一部とも考えられる。



第20圖 605T出土土器実測図 (1:3)

V ま と め

本年度の調査は府中市元町砂山地区・松原地区に調査トレンチを設定し、実施した。ここでは、それぞれの地区での調査の結果を概観するとともに、出土土器について若干の検討を行い、まとめとした。

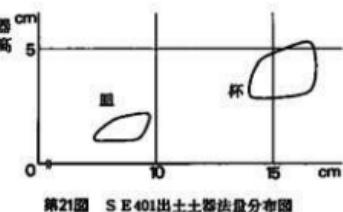
1. 砂山地区における調査結果

造構について 各トレンチにおいて古代～中世のピット群、溝状造構などを検出し、造構のひろがりを確認した。また、この度の調査を含め、元町周辺における当該期の地割の変化の一端を窺うことができた。すなわち同地区的旧地形は北東～西南方向に低い微高地がのびていたと考えられ、また、元町以外の周辺の地割が東へ約30°振れていますから、同地区も同様であったと思われる。しかし、S B603 (601T) 及び第4次調査のS P 403・404 (403T) の方向は、真北から4°(磁北から約10°) 前後東に振れるだけであり、さらにS A601・602 (601T)、S D609～614 (603T) はほぼ真北に近い方向を示していることから、人為的に地割りが形成された可能性がある。磁北から10°前後東に振れる造構は偶然にも、第3次調査の8世紀代に比定されるS B304 (305T)・305 (306T) (それぞれ磁北から約8°、10°東に振れる) があり、また、再検討の結果、奈良～平安時代とみられる302TのP 2とP 5及びP 1とP 4がつながる可能性の有するもの(磁北から約100°東に振れる) がある。S P 403・404も奈良～平安時代前半と考えられ、また、ほぼ真北方向に近い造構は平安時代後半～中世に比定される。これらのことから、奈良時代前後に磁北から10°前後東に振れる地割がある程度のひろがりをもって存在し、平安時代後半前後にほぼ真北方向に近い地割が形成され、現在に至っていることも考えられる。

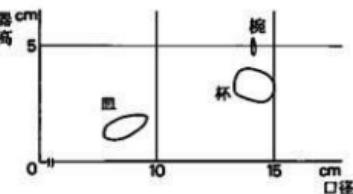
次に井戸S E618は、第4次調査のS E401に統いて2基目であるが、その構造・埋没状況などは大きく異なる。つまり、S E618は湧水点が低く底が深いもので、簡易な構造をし、自然的な埋没状況を示すのに対し、S E401は湧水点が高く底が浅いもので、丁寧な造作が窺え、多量の土器を一括埋置した様子がみられる。時期については構造はともに奈良～平安時代にみられるもので、土器はS E618のものは11世紀代、S E401のものは11世紀後半～12世紀前半に比定され、両者が並存するか、S E618が古くなると考えられる。これらから、S E618と湧水量の多いS E401が相次いで直近に造営された背景には周辺の人口の増加あるいは生活の奢侈化があるようと思われる。以上のように砂山地区では奈良時代以降、人為的に周辺とちがう地割りが形成された可能性があり、更に平安時代後半以降、井戸が相次いで作られるなど、集落の活況を呈していたものと考えられる。

遺物について 各トレンチから多量の遺物が出土した。特に S D 608 (603T) から400個体以上の土器が土器満り状となって出土し良好な資料となる。また、S E 619から細片ながら基本的な資料となり得る土器類が出土した。なお、古墳時代前期の土器が S X 604 をはじめ主に 601・602T から多量に出土した。

まず、S D 608 出土土器についてみると、圧倒的に土器皿・杯が多く、これらを中心に法量を計測して整理した。なお、比較のため S E 401 出土土器についても行った。S D 608 の皿は口径 7.7~9.6cm、器高 0.9~2.1cm の範囲に入り、杯は 13.3~15.1cm、器高 2.5~4cm である。一方、S E 401 出土の皿は口径 7.8~9.7cm、器高 1~2.2cm であり、杯は口径 14~16.7cm、器高 2.9~5.3cm の範囲に入る。以上の計測値を第 21・22 図にまとめた。皿はほぼ同値であるが、杯は S D 608 がやや小型である。備後南部では平安時代～中世において、時期の変遷に伴って土器・土師質土器（特に皿・杯・碗）の法量も変化することが示され、その中で、福山市吹越中世土塙墓出土例から草戸 I 期にかけて法量が小型化することが明らかとなっている。このことを援用できれば、S E 401 から S D 608 への杯の小型化は若干の時間の経過を示しているといえる。S D 608 出土碗は法量が吹越中世土塙墓出土例の法量の範囲に入ることなどから、ほぼ同時期と考えられ、草戸 I 期以前となろう。また、S E 401 出土例が 11 世紀後半～12 世紀前半と考えられることから、S D 608 出土例も 12 世紀代と考えられる。なお、須恵器碗（45）は久井町居舟窯跡出土例などに類似しており、近在から供給されたものと思われる。次に S E 618 出土土器について、土器皿（47）はいわゆる「て」の字状口縁をもつもので近畿地方で 10~11 世紀代によくみられる。碗（48・49）はその高い高台の形態が石鎚山中世墳群出土例などに類似し、11 世紀後半に比定されている。碗（50・51）はいわゆる「早島式土器」碗に共通し、11 世紀代以降とみられる。須恵器碗（53~55）は東広島市道照跡出土例・小越窯跡出土例などに類似し、平安時代後半とされる。白磁は型式は不明瞭であるが、主に 11 世紀後半以降に多くなる。⁶⁰ これらのことから S E 618 は 11 世紀代とみられる。以上、ごく大まかであるが、これらの土器は、11 世紀代から 12 世紀代にかけて S E 618・S E 401・S D 608 の順に並ぶようである。これらは並存あるいは数型式がその間に入るこ



第21図 S E 401出土土器法量分布図



第22図 S D 608出土土器法量分布図

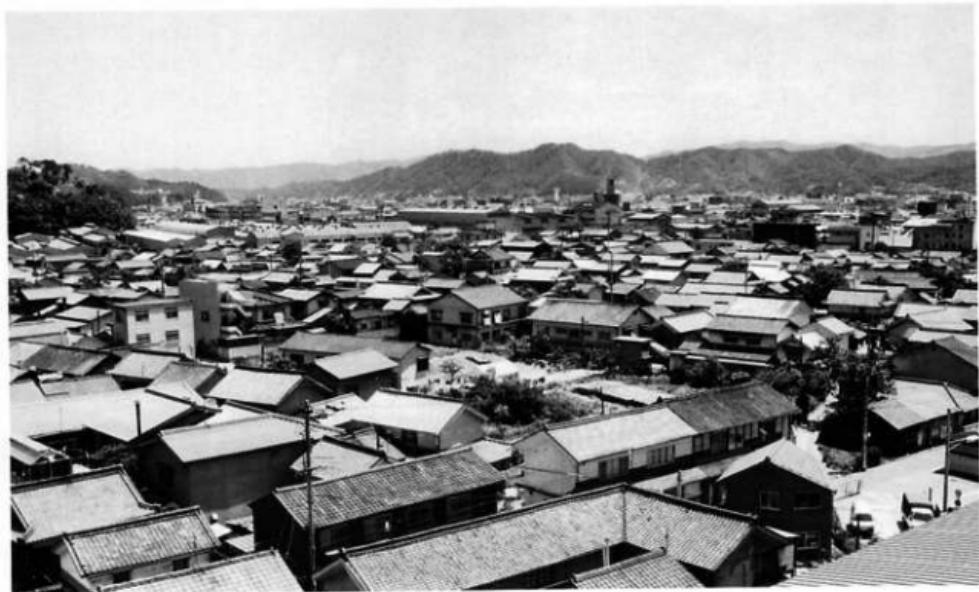
とは十分に考えられ、今後、当該期の資料の出土が待たれる一方、既出土資料の同器種内で形態差や調整・胎土・焼成などの差がみられることから、より詳細な検討をする。古墳時代前期の土器は S X 604で一括出土した。同様の資料は神辺町御領遺跡 S D09上層出土例がある。特に壺・鉢の形態・調整は酷似している。S D09出土例は庄内式最新相ないし布留 I 式の古相と推定され、S X 604出土例もほぼ時期が同じと考えられる。一方、S D 605・S K 607及び601T包含層出土の壺はほぼ同形態で、S X 604出土壺より丸底で球形化するなど、やや新相を呈し、御領遺跡 S D09出土例に併行するか、それに後続するものと思われる。なお、壺(111)は(90)より古相を示し、弥生時代後期後葉のものに近いと思われる。府中市内では同様の土器が千原墳墓群でも出土しており、この地域の弥生～古墳時代の様相を知るうえで良好な資料が得られており、今後の研究が待たれる。

2. 松原地区における調査結果

605Tからは奈良～平安時代の溝状遺構、ピットなどを検出し、第4・10層が当該期の遺物を豊富に包含していることを確認した。S D619の時期は出土の須恵器蓋(136)が陶邑
編年のIV型式第1ないし第2段階にあたり、8世紀前半頃と考えられる。これは真北に近い方向にのびることから奈良時代に元町東方でも人為的に形成された地割が存在していた可能性があり、平安時代にかけて緻密に遺構が広がっていると考えられる。

- 註(1) 横田賢次郎「太宰府検出の井戸一とくに形態分類を中心として」『九州歴史資料館研究論集』3 九州歴史資料館 昭和52(1977)年。
小部隆「草戸千軒町遺跡の井戸Ⅲ一年代を中心にして」『草戸千軒』No.54 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 昭和52(1977)年。
(2) 志道和紅「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案」『草戸千軒』No.48 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 昭和52(1977)年。
(3) 広島県教育委員会・飼広島県埋蔵文化財調査センター『石鏡山古墳群』昭和56(1981)年。
(4) 児木康之「草戸千軒町遺跡 S D1290出土の土器類について」『草戸千軒町遺跡』第一回発掘調査報告書—1982 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 昭和58(1984)年。
(5) 佐藤昭嗣「篠後の古跡」『昭和61年度歴史講座10資料(第163回草戸文化財教室)』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 昭和62(1987)年。
(6) 鈴柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器・陶磁器—大阪・京都を中心に—」『第6回中世土器研究集会—古代末から中世の土器・陶磁器—資料』日本中世土器研究会 昭和62年(1987)年。
(7) 註(2)と同じ。
(8) 福田正雄「瀬戸内海中部北岸域の土師質陶器について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 昭和60(1985)年。
(9) 広島県教育委員会・飼広島県埋蔵文化財調査センター『道鏡遺跡』—西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書—昭和57(1982)年。
(10) 広島県教育委員会・飼広島県埋蔵文化財調査センター『小越窯跡』『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 昭和58(1983)年。
(11) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 昭和53(1978)年。
(12) 広島県教育委員会・飼広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』—国鉄井原線建設に係る発掘調査報告—昭和56(1981)年。
(13) 飼広島県埋蔵文化財調査センター『大明地遺跡』P.293『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和62(1987)年。
(14) 福山市石鏡推現遺跡C地点38号土器層(S X 38)出土壺(44)など。広島県立埋蔵文化財センター『石鏡推現遺跡群発掘調査報告』—c 地点— 昭和60(1985)年。
(15) 府中市役所市史編さん室『目で見る府中の歴史 千原墳墓群』昭和62(1987)年。
(16) 大阪府教育委員会『陶邑』 大阪府文化財調査報告書 第30号 昭和53(1978)年。

図版



元町砂山地区近景（北西から）

図版-1



a 601 T
遺構検出状況
(南東から)



b SX 604 (601 T)
遺物出土状況
(北西から)



c SD 605 (601 T)
検出状況
(北から)

a 602T

遺構検出状況

(北西から)



b S X606 (602T)

瓦片出土状況

(北西から)



c S K607 (602T)

遺物出土状況

(南東から)



図版3



a 603T
遺構検出状況
(北東から)



b 同上
(西から)



c S D 608 (603T)
遺物出土状況
(西から)

a S D608 (603T)
遺物出土状況
(北から)



b S E618 (604T)
上層集石検出状況
(北東から)



c S E618 (604T)
完掘状況
(北東から)



図版 5

a 松原地区近景
(北から)



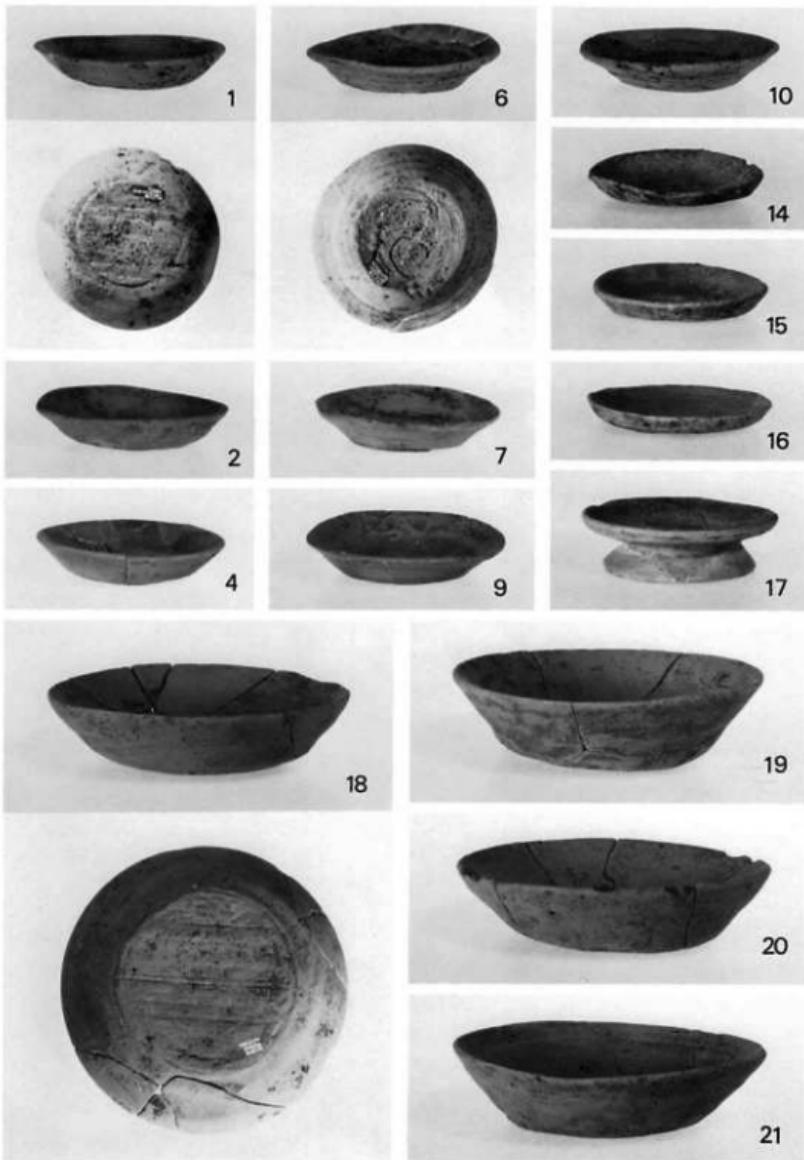
b 605T
遺構検出状況
(東から)



c 605T
土層堆積状況
(南から)

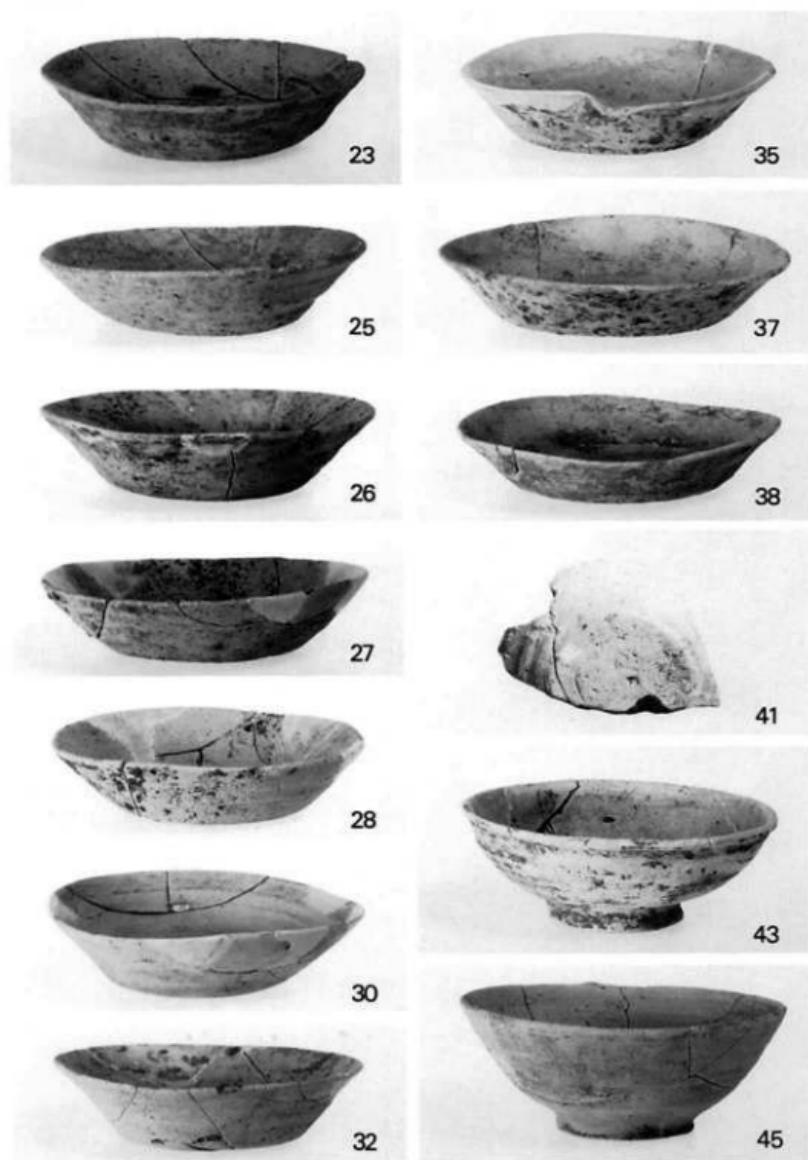


図版 6

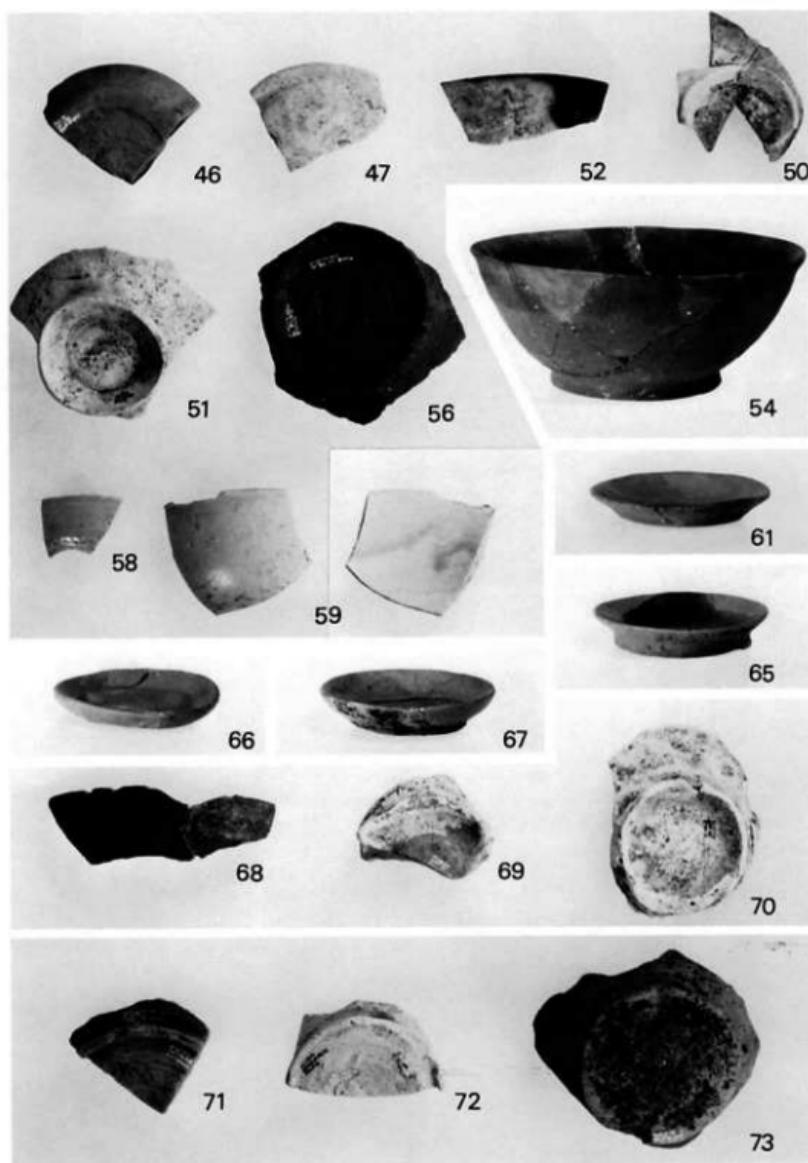


SD608 (603T) 出土土器 (1)

図版7

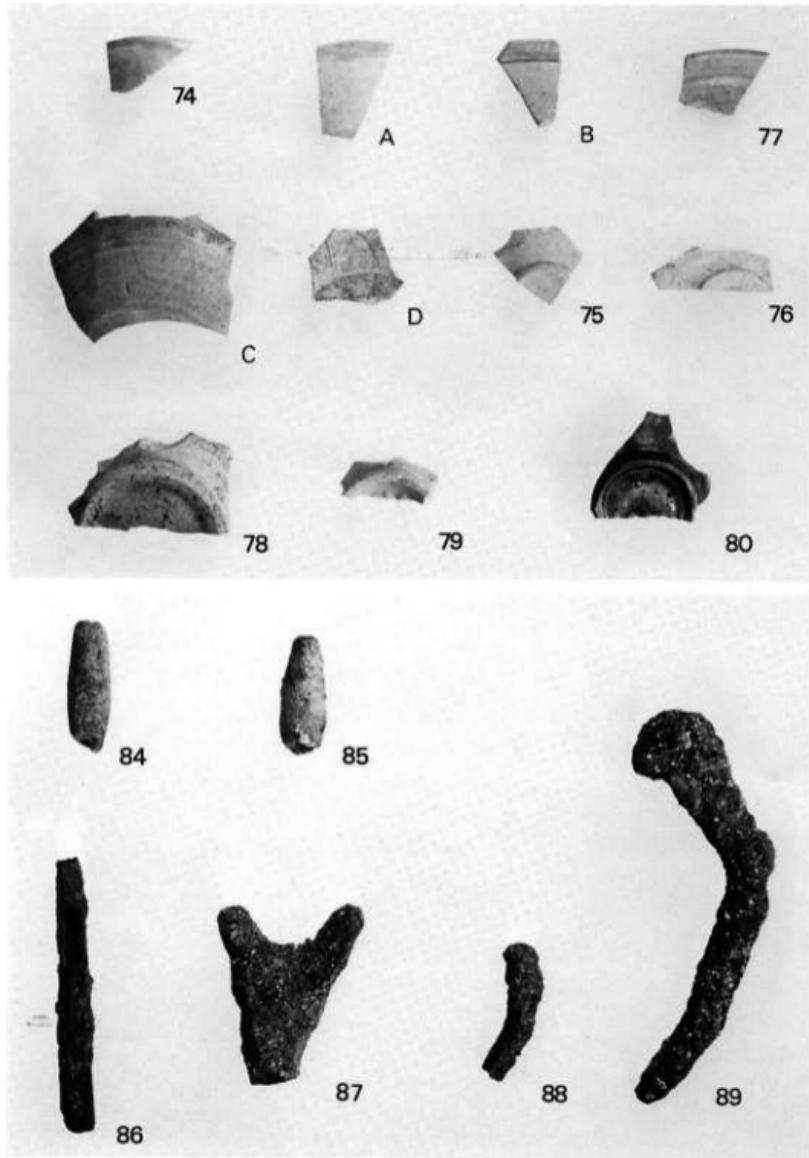


図版 8



603T・604T 出土土器

図版 9



603T 出土 土器・土製品・鉄器

図版10



81



82

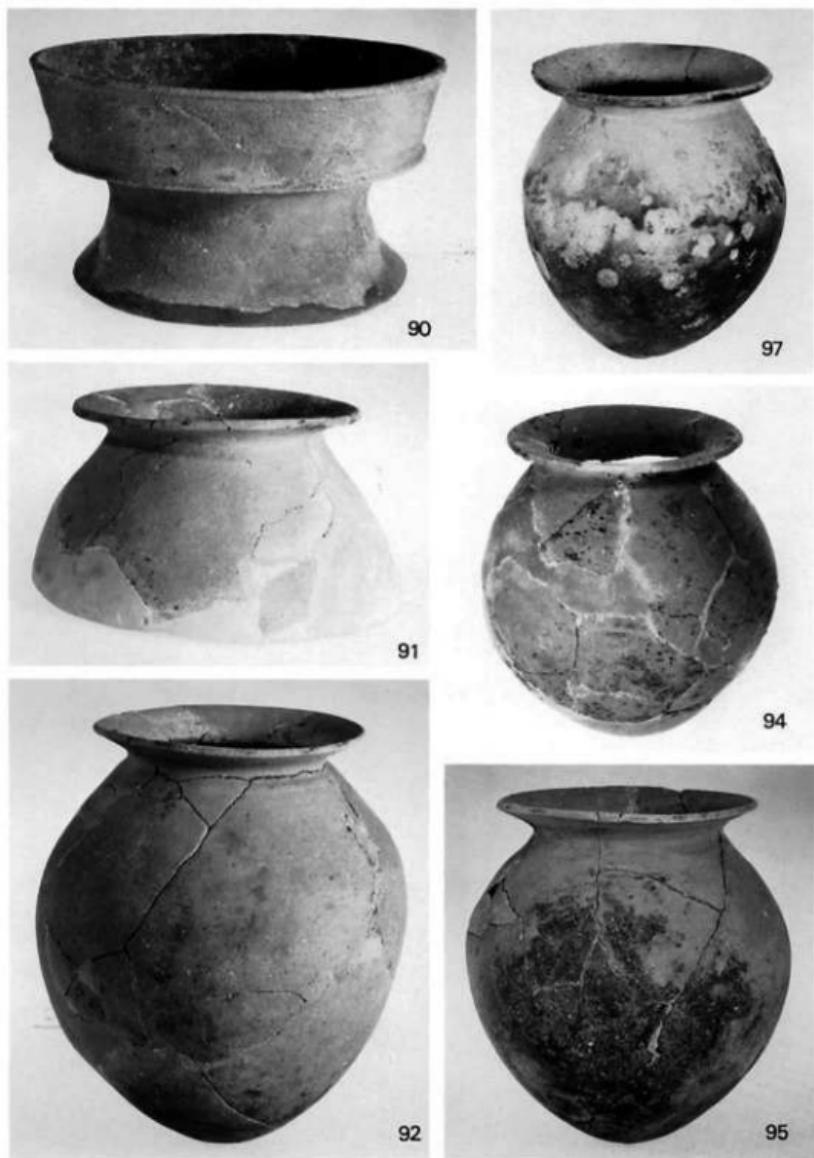


83



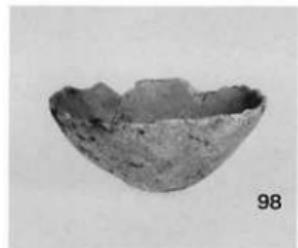
602T・604T 出土瓦

図版11

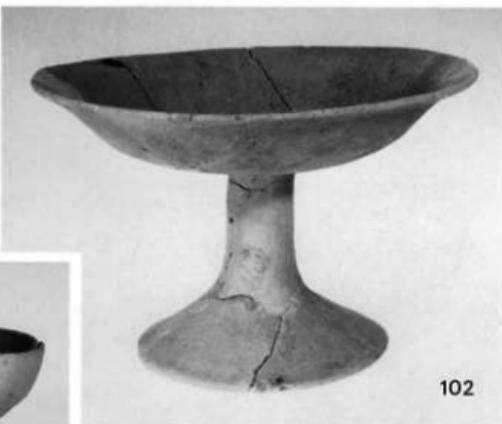


S X604 (601T) 出土土器 (1)

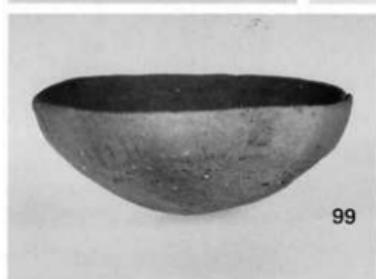
圖版12



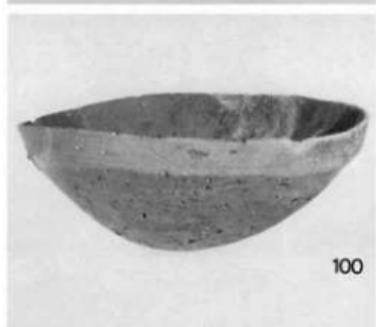
98



102



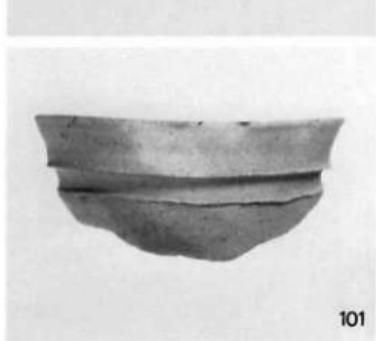
99



100



103



101



104

S X604 (601T) 出土土器 (2)

圖版13



105



106



107



109



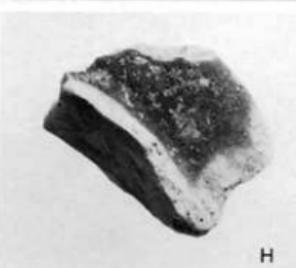
108



110

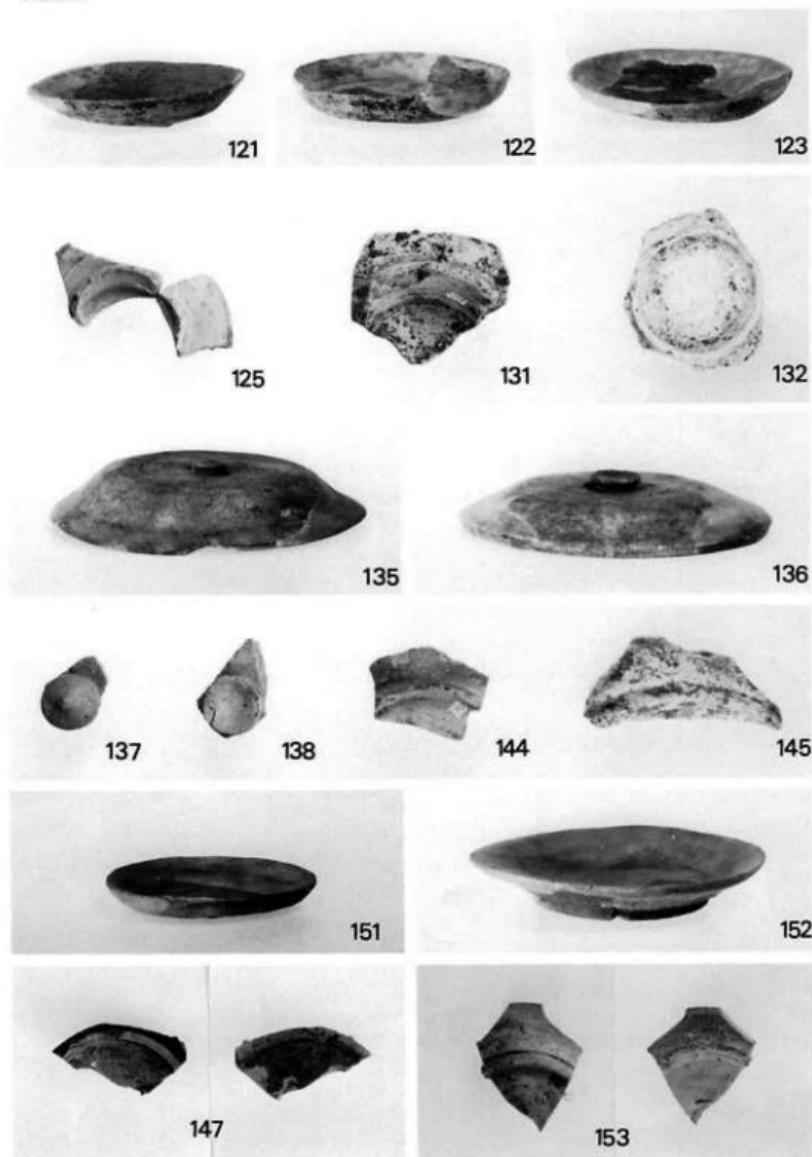
601T・602T 出土土器

図版14



601T 出土土器及び 605T 出土土製品

図版15



備後国府跡

—推定地にかかる第6次調査概報—

1988

昭和63年3月31日発行

編集 広島県立埋蔵文化財センター

広島市西区観音新町4-8-49

電話 (082) 295-5451

発行 広島県教育委員会

印刷 弟柳盛社印刷所

電話 (082) 221-2148